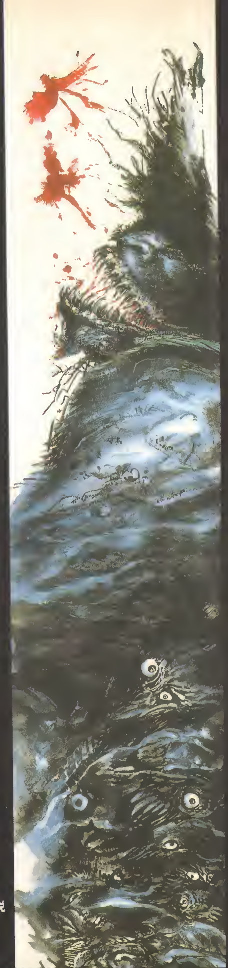
THE DEVILMAN

THE DEVILMAN

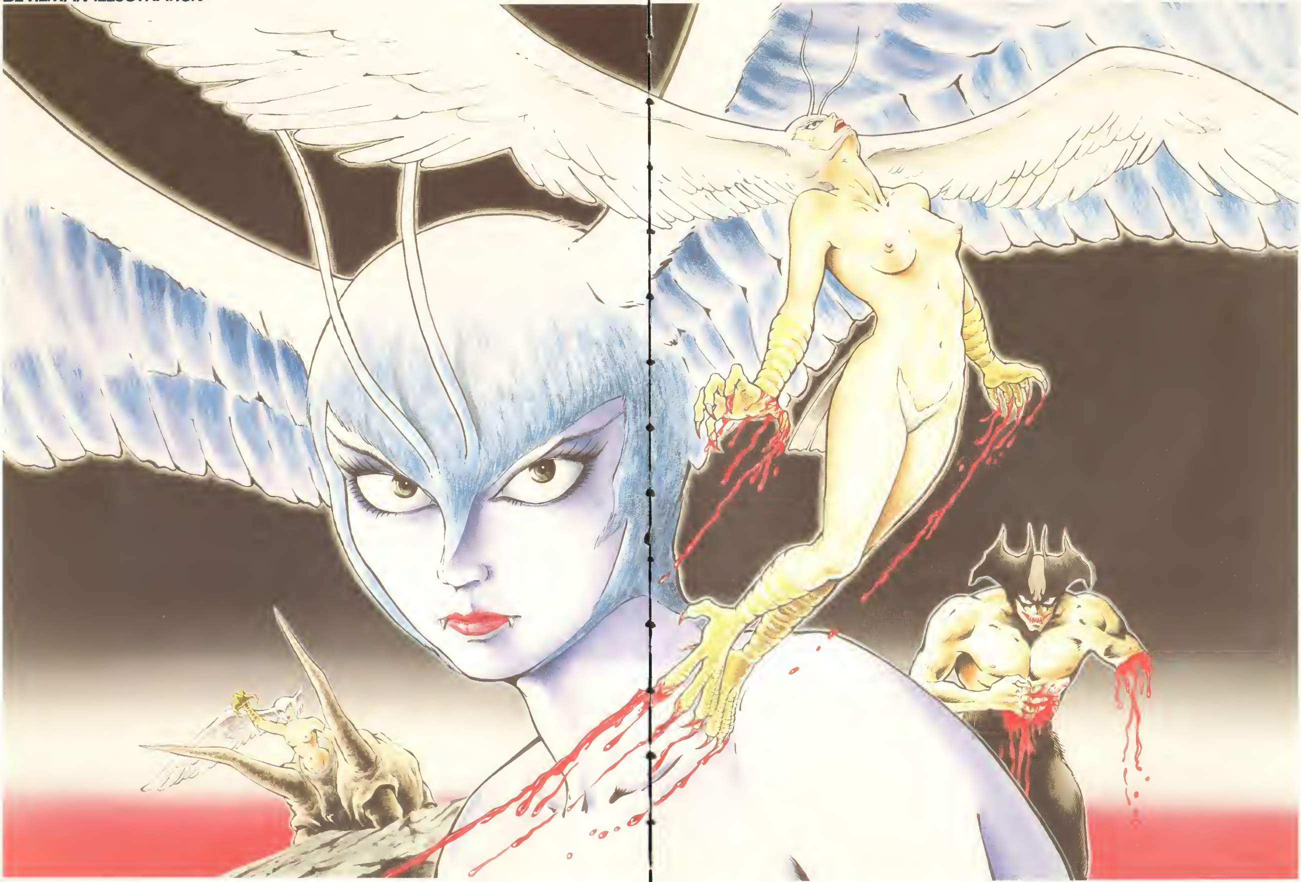
ケイブンシャ

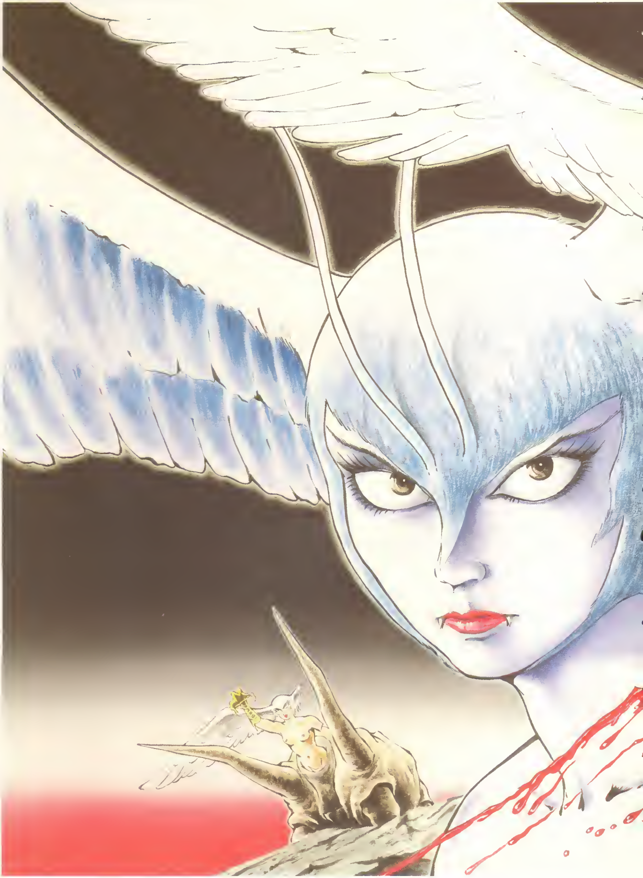


©1990 Keibunsha Printed in Japan 定価：本体1340円＋税

ISBN4-7669-1228-4 C0076 ¥1340E

DEVILMAN ILLUSTRATION





THE DEVILMAN
THE DEVILMAN
ケイブンシャ

バキッ

※バンダイのOVA「デビルマン-妖鳥シレーヌ編」に付録として付けられていた「悪魔図鑑」より。

※バンダイのOVA「デビルマン-妖鳥シレーヌ編」に付録として付けられていた「悪魔図鑑」より。

「悪魔図鑑」より。

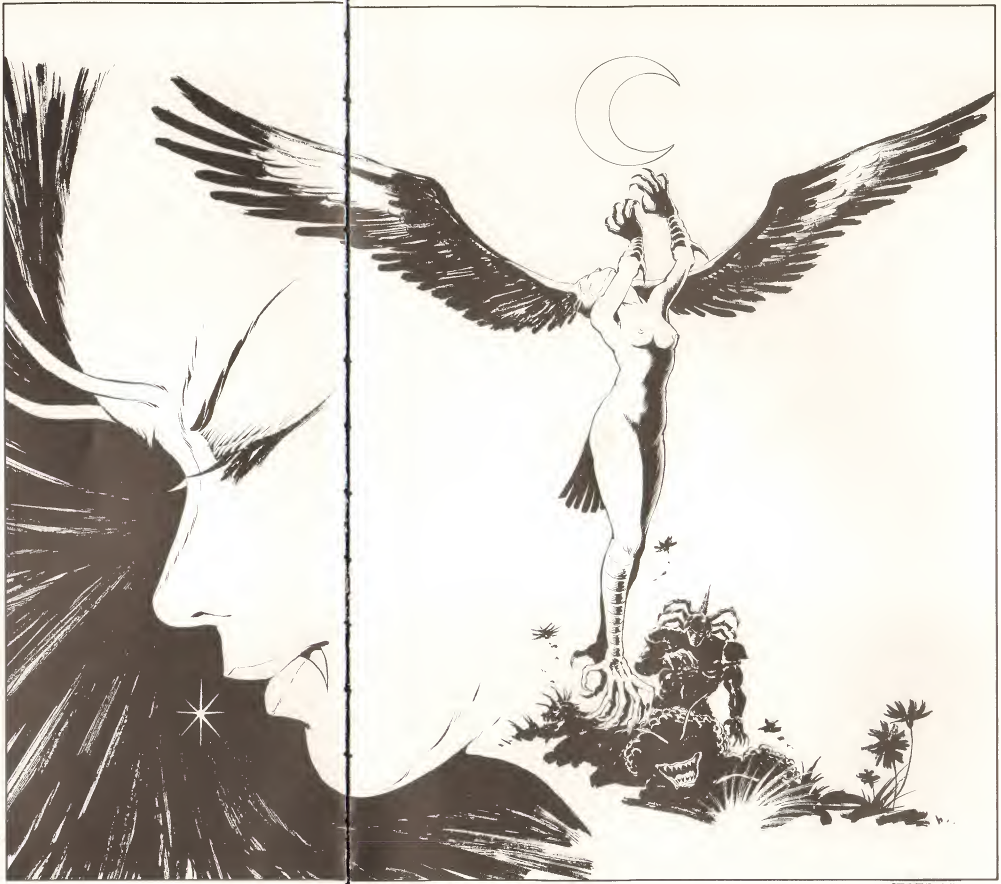
「悪魔図鑑」より。

「悪魔図鑑」より。

Bassom

Balass

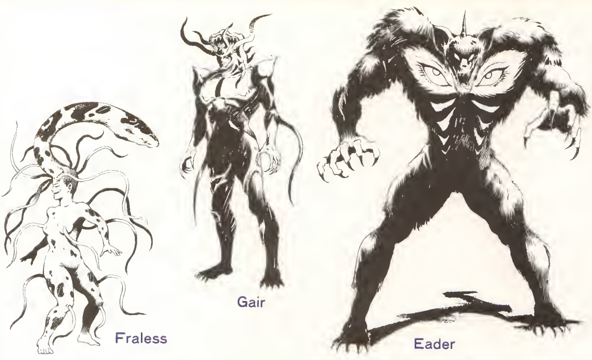
Beeq



「悪魔図鑑」より。

「悪魔図鑑」より。

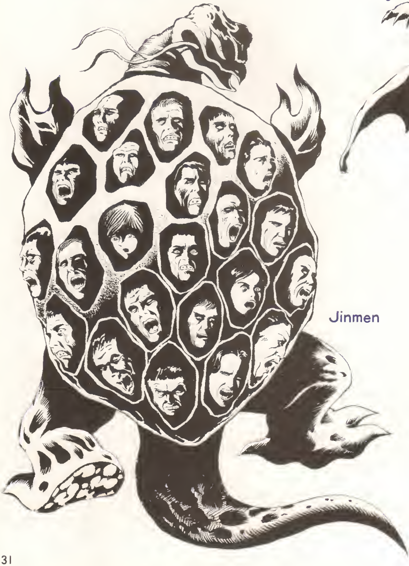
Vegard
Welbath
Xeed



「悪魔図鑑」より。

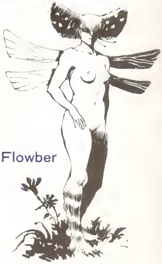
Elephas

Ijam



Jinmen

Imclugent



Flowber

Medok

Maligera

Loscead

Millage

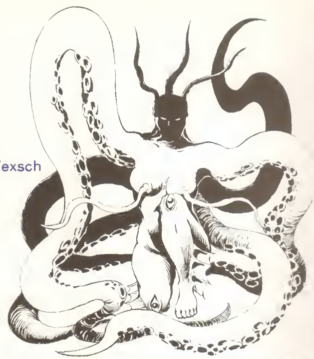
Mearmo

Vishvalic

「悪魔図鑑」より。

Urigaros

Tollg



Texsch

Phycojeny

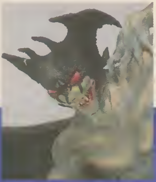
Odom

Nulda

Ozott

「悪魔図鑑」より。

DEVILMAN FIGURES



DevilMan & Sireenu

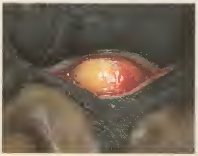
Sireenu

Jinmen

Zenonn

Zenonn

Jinmen



DevilMan

※フィギア製作／VOLKS 撮影／SUGA HIDEHARU

DEVILMAN FILMSTORY

ORIGINAL VIDEO ANIMATION

誕 生 編

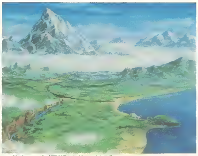
ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

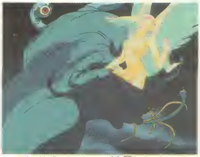
誕生編

了が明の前に現れる、大きな恐怖をつれて——

▲夜空に天使が舞い下りてくる。


▲美しい氷河期以前の地球。

▲天使は醜いデーモンの存在を許さない。


▲だが、地球はデーモンが支配している。

▲天使の光があつまり、戦いが始まる。

▲堕天使サタンへ集合するデーモン。

▲氷の柱の中でうごめく物体を見つける。

▲氷河探検中の不動教授一行。

氷河期以前、地球の表面を木深い原始林がおおい、巨大な爬虫類がのし歩いていた時代。人類が誕生するはるか以前、地球にはべつの人類が存在していた。その人類とは戦闘民族デーモン。戦闘本能の強いデーモンは、より強くなるために合体能力を持っていた。そして、くりかえし合体のため、醜い怪物のような姿をしていた。あくなき闘争本能で殺戮をくりかえし、より強くなるために次々と合体し醜さをますデーモン。その存在を地球の創造主である神はいみきらい滅ぼそうとした。そして、両者のあいだで、壮絶な戦いがくりひろげられたのである。戦いはながいあいだつづくが、氷河時代の到来とともに、神は戦いに勝利し、デーモンを暗く深い氷の壁に閉じこめてしまった。そして、ながい眠りにつかされたデーモンは、いつしか歴史の流れの中から葬り去られてしまっていた。

探検家を両親に持つ不動明は、両親が氷河探検で行方不明になってしまったため、父の友人だった牧村家にやっかいになっていた。いっけんとてもおとなしく、弱々しそうに見える明。だが、その内には強い意志と純粋な心、そしてやさしさを持っていた。暴力を嫌い、決して相手の暴力にも屈せず、時にはひどいケガをすることもある。しかし明は暴力での抵抗はせず、強い意志で相手を見るのである。そんな明を見ながら

▲復活したデーモンとの遭遇におどろく。

▲一行の前に煙の中からジンメンが現れる。

▲氷が崩れ、下敷きになりそうになった。

●両親が行方不明の明、彼は純粋な心を持った青年だ。いっけんおとなしいそのようすに不良にからまれ、ときにはひどいケガをすることもある。

▲ケガした明へ、あわててかけよる美樹。

●美樹は、やさしい明に好意をもち、いつも気づかい心配している。明るく活発な美樹は、はっきりせずふさぐ明にいつもイライラしている。

いつも心配しているのが、牧村家の長女、美樹だった。美樹は明とちがって行動的で活発な女の子、同居人である明のやさしさに好意を持ちつつも、いつも煮え切らない態度の明にいらいらしている。ある日、不良にからまれ、ひどいケガをした明。それを見つけた美樹はあわてて明を保健室へつれていく。そんな大げさに騒がなくてもいいよと言わんばかりの明。

「なにしてんのよ、早くこっち来なさいよ」

「たいした傷じゃないよ。大丈夫だってば」

「ほら、顔上げて」

「イテテテおれ、自分でやるよ」

「タレちゃんの手当てでなれてんの。ほら私にまかせなさい」

「ありがとう」

「ちょっとは自分のことも考えるんだぞ。その傷のこるよ、きっと。さっきは心臓が止まるかと思ったぞ!びっくりしたんだから」

明をのぞきこむように話す美樹、ふたりはしばらく見つめあっているが、明は美樹の言葉の意味がわからない。きょとんとし、活発な美樹とくらべて自分のふがいなさを情けなく思う明。美樹から目をそらしてしまう。怒ったように言う美樹。

「バカ! もう遅いから帰るよ!」

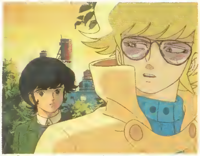
さっさと保健室から出ていってしまった。あわてて、美樹のあとを追う明。

「待ってよ、美樹ちゃん!」

▲声の方を見るが暗がりでよくわからない。

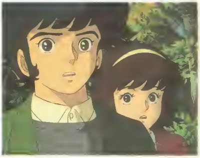
▲「不動明！」林のカゲから突然呼ぶ声。

▲学校の帰り道、話しているふたり。


▲「明！　おまえに用ができた。きてくれ」

▲暗がりから現れたのは明の転校前の同級生、飛鳥了だった。深刻な顔をして近づいてくる了。

▲楽しい時を邪魔され美樹はムクれる。



●一緒に行くのかと明につめよる美樹「ああ、あいつなにかようすが変だ」美樹は一緒について行くと言いだすが了は激しくそれに抵抗する。

公園の脇道を通って帰る美樹と明。その時、公園内の暗がりから明を呼ぶ者がいた。突然のことにおどろいて声のほうを見るふたり。そこには、明の以前いた学校の同級生、飛鳥了がいた。久しぶりの再会によろこぶ明、だが了の表情はかたかった。明は了に美樹を紹介するが、了は無視して明に話しかける。

「明、お前に用ができた。家まで来てくれ」

そう言うとすぐ、先にたって歩きはじめた。ただならないようすについて行こうとする明。無視された美樹はムッとし了につっかかっていく。

「あの－飛鳥さん、今日は明君、ちょっとつごうが悪いんです。ケガもしてるし……それに私達だいじな話の途中なんです！」

「こっちの用のほうが重要だ！」

と冷たくいいはなつ了。怒る美樹は明をつかまえくってかかる。

「明君、あいつと一緒に行く気」

「あいつなんかようすが変だ」

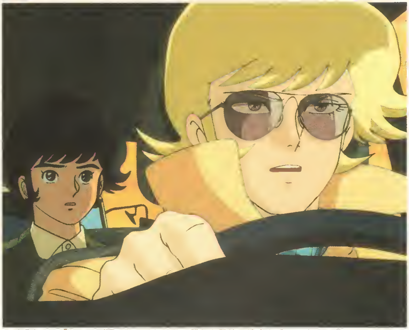
要領をえぬまま了についていこうとする明。美樹は、自分より了についていこうとする明にムクれている。

「いいわ、あたしも一緒に行く」

と言いだした。しかし、そんな美樹に了は、ナイフをつきつけ叫ぶ。あわてる明。

「女はいらない、時間がない、たのむ明きてくれ」

そのただならぬ行動に明はおどろき、美樹はもうなにも言うことができない。了は車に乗り込む。明にも乗る



▲説明する了「おやじが死んだ」そして父の残した恐怖の遺産を受けてくれと明に了はたのむ。

▲美樹をおいて車に乗るふたり。

▲車は急発進でスタートする。

▲ついにカミナリの晩、了を殺そうとした。

▲それは、優しかった父の仕業らしかった。

▲ある日、犬が首無し死体で見つかった。

▲おどろき、なにも言えない明。

▲恐ろしいできごとを静かに話す了。

▲そして、ガソリンをかぶって自殺した。

ようにうながしスタートさせた。そんなふたりを美樹は、ただぼうぜんと見送った。

いらだちぎみに車を走らせている了。交差点でも減速せず乱暴にまがる車、激しくブレーキ音が響く。いったい了になにが起こったのか？ 明はたずねようとする。運転しながら了はしずかに話しはじめた。

「おやじが死んだ、自殺だ！ ガソリンをかぶって火をつけた。おやじは息が絶えるまで、次々とガソリンをかぶりつづけた」

おどろく明。了は話しつづける。ことのはじまりは、次々とペットが殺された事件があり、それが父の仕業らしいのだ。優しかった父がなぜこんな残酷なことをしたのか、その変わりようが了には理解できなかった。しかも、あるカミナリの鳴る晩、父は了をも殺そうとしたのだった。間一髪で起き、父に向かって叫ぶ了。その声に父は自分がしたことにうろたえ走り去った。

「そして、死んだ…黒コゲになったおやじの死体は、体重が生きていた時の倍あった。体の大きさは変わってない。体重だけがふたり分あった。おやじは遺産を残した。恐ろしい遺産を。知ってしまったからには受けなければならない。だが、オレひとりで受けられるようなものではないんだ。不動明、おまえにも恐怖の遺産を受けてもらいたい」

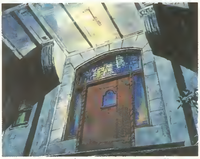
ほとんど怪談に近い了の話は、ただ明を困惑させた。

ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

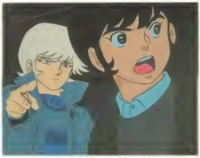
DevilMan

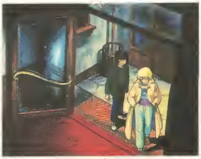
誕生編

デーモンは復活した それを証明する了——


▲ひっそりとしずまりかえっている屋敷。

▲車はしずかに了の屋敷の前についた。


▲了は明をある部屋へ案内し、見ろと言った。


▲手入れがゆきとどかずに荒れている屋敷。

▲そこにはボウッとした光を放つ悪魔のような形の仮面があった。明は悲鳴を上げている。

車はしばらく走った後、ようやく了の屋敷につく。その屋敷は人が住んでいたとは信じられないほど、さびれていた。入口にはすごい数のカギがかけられている。そのようすからも、明はただごとではないことを感じた。屋敷へ入りながら了は話しつづける。

「おやじが考古学者なのは知ってるな」

「ああ、有名な学者だからな」

了はある部屋へ明を案内する。そのまっ暗な部屋には恐ろしい形相をした岩の仮面がボウッとした光を放っていた。数カ月前、了の父は調査旅行で行ったマヤ遺跡の近くでジャングルのしげみに隠れていた穴にすべり落ちてしまった。底は以外と深く、どこまでも急な斜面をすべり落ちていった。ようやくたどりついた穴の底で、奇妙な物を発見した。それは、まるで人間の持つ悪魔のイメージをそのまま形にしたような岩の仮面だった。しかも、どう見ても作り物にしかみえないその仮面は氷河期以前の地層から発見されたのだった。つまり、これは人類が誕生するはるか以前の時代に作られた物だった。

「でも、自然にできた物には見えないけどな」

明はつぶやく。だが了は言う、それはまぎれもなく作られた物と。では、いったい誰が？　明の疑問に了は確信を持って答えた。

「地球の先住人類デーモン！　すなわち悪魔」

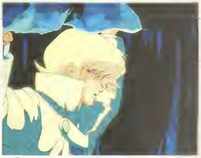
▲それはデーモンの歴史書だった。

▲かぶった者にそのイメージを伝える。

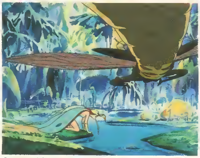
▲説明する了。これは作り物だ、だが人類が作った物ではない、地球の先住人類デーモン

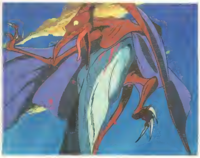
▲デーモンの世界が明の目の前に広がる。

▲気味悪がりながらもかぶる明。



▲明に、これをかぶってくれとたのむ了。





●人類が存在する以前の地球。巨大な生物がのし歩く世界に戦闘民族デーモンが殺戮をくり返している。まさに力の歴史、悪魔の世界だった。

屋敷のまわりの空気が緊張する。

「文字を持たないデーモン達はこの物質に記憶を折り込んだ。これはデーモンの歴史書なんだ。かぶった者の脳に直接デーモンの世界が浮かんでくる。デーモンの歴史が…明これをかぶってくれ」

仮面を持って明につめよる了。あまりのことに気味悪がる明。

「明、おやじはこれに命をかけた、これをかぶらなければ、おやじの自殺の意味がわからない！　それでもかぶってもらえないのか…」

激しくつめより懇願する了に明も覚悟を決める。

「わかったよ了…」

了の手によって明の頭に仮面がゆっくり下ろされた。その瞬間、明の目の前に展開した風景、地獄だった…まさに地獄の光景だった。その残忍なイメージの記憶に悲鳴をあげる明、叫ぶ了。

「はずすな、しっかり見てくれ。それが悪魔の世界だ！」

明の見たデーモンの世界、戦闘民族であるデーモンにとって弱さは死を意味する、それは力と殺戮の歴史だった。そして合体能力を持つデーモンは、強い者もさらに強くなるために合体をくり返す。くり返しの合体により醜く変身していくデーモン、その姿はまさに悪魔と呼ぶにふさわしいものだった。デーモンのイメージは、明をかぎりない恐怖の中へ引きずりこんだ。場所を移して、気を休める明。

▲弱い者は生き残るために、強い者はより強くなるために合体をくりかえす。

▲日々を戦いにあけくれるデーモン。

▲この世界で弱いことは死を意味する。

▲デーモンは合体の対象を選ばない。

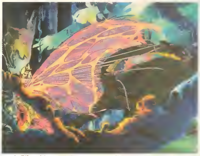
▲動物、植物なんとでも合体できるのだ。

▲くりかえしの合体のために醜さをましていくデーモン。

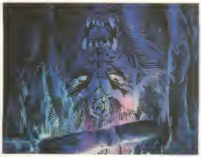
「悪魔が…本当にいたなんて」
「気の弱いおまえには、ちょっと刺激が強すぎたかな…」
了は、まだショックから立ち直れない明に水をさしだす。一気に水を飲みほす明、ようやく落ちつきをとりもどす。
「人間は運がよかったわけだ…デーモンが滅びてくれたおかげで恐ろしい敵にであわずに進歩することができたんだから」
「そう思うか…」
了はあくまでもおちついて話す。
「デーモンが滅んだのなら、なぜ人間は悪魔のことを知っている、世界中に残る悪魔の伝説の意味はなんだ、今まで悪魔は神と同じ空想の産物と思われていた、だが悪魔はいた！」
了はダンテの「神曲」という本を例にとって説明する。これは13世紀イタリアの詩人ダンテが書いたものでここには地獄、煉獄、天国をダンテが見てまわるようすが描いてある。その中に地獄の最下層で悪魔が氷づけにされている姿が描かれていた。恐ろしい寒さのなかで、コウモリの羽を持つ巨大な魔王ルキフェルが、胸まで氷につかり身動き出来ずに苦しんでいるようす、そこにはまるでその光景をまじかに見たかのように描かれているのだ。
「なにか感じないか、この話」
明のほうを見る了。信じられないという表情の明。
「ダンテがその者を本当に見たとか、デーモンが氷河期かなにかで、氷に

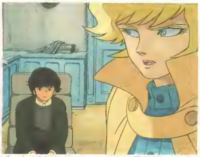
▲おしよせるデーモンのイメージに恐怖し足場のなくなる感じがする明。叫びとともに気を失う。

▲かつての地球上につづく闘争の日々



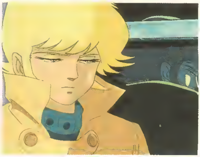
▲人間の持つ悪魔のイメージの世界だった





●人類は運が良かった、デーモンが絶滅したおかげで生き延びられたのだからと言う明を了は歴史に残る悪魔伝説をとりあげ否定する。

▲ア然とする明を地下室へ案内する了。



▲デーモンは復活する。地球を取り戻すため。

▲「そんな！」叫ぶ明。

「閉じこめられたとか……」

これから起こる恐ろしいことを予感するかのように了は言う。

「デーモンは氷に閉じこめられた冬眠状態のまま生き残った。そして今現代によみがえろうとしている、地球を奪い返すために！」

明の脳裏には氷河で行方不明になった両親、実はデーモンに殺されたのではないかと考える。

「そんなっ！」

「デーモンは武器を持たない人間の弱さを知っている、だから人間が武器を持たないうちに、人間が認めないうちに、気づかれないように、影のように忍びより殺すだろう」

あくまでもデーモンの存在を認めて現実をシビアに見つめようとする了。

「うそだ、なぜそんなことが断言できる！」

明は落ちつき話す了にいきどおりを感じている。だが、了の父によってそれはすでに証明された事実だった。デーモンの思考を探るために合体した父の日記にすべてが記されていたのだ。そこには、自殺しなければならなかったワケ、そしてデーモンと戦う方法も書かれていた。それが父の残した恐怖の遺産だった。事態を認めざるえなくなった明。

「恐怖の遺産とは、それのことか」

力なくつぶやく。うなだれる明に了は休む間をあたえない。恐怖の遺産を受けるために、明を地下へと案内する。

「来てくれ、地下だ」

ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

誕生編

戦うための恐怖の遺産——明は受ける決心をする

▲「デーモンだ！」

▲突然、激しく割れるガラス

▲屋敷を脱出しようとするふたり。

▲タコ型デーモンが現れた。

▲後ろからクモ型デーモンが現れる。

▲了はふりむきざまショットガンを撃つ。

▲窓ガラスを破って脱出する。

▲はさまれる了と明。

ふたりが廊下へ出た瞬間、窓ガラスが割れデーモンが現れた。デーモンにとってこれからの人類絶滅の作戦には、このことを知っている人間がいてはまずいのだ。明と了を襲う。屋敷は危険と感じ、外へ逃げようとするふたり。しかし、目の前にまた別のデーモンが立ちふさがる。2匹のデーモンをふりきり外へ逃げる明と了、間一髪、車で屋敷を脱出した。車の中で、了は明にショットガンを渡す。

「死にたくなければ、撃て」

ショットガンを渡され、ためらう明。明はまだデーモンとの戦いに戸惑いを感じていた。突然後部座席のシートがふくらみ液体を噴出した。液がかかり悲鳴をあげる明、あせる了。

「しまった、デーモンだ、車をのっとられた！」

窓のガラスをブチ破って脱出しショットガンで車を爆破してしまう。

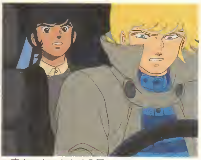
「これが、デーモン」

はじめてのデーモンとの接触にただガクゼンとする明。

「すまん、明お前をまきこんでしまった。だが、おれにはお前以外の者はすべて敵に見える。信じられる人間は不動明、お前だけなんだ、わかってくれ」

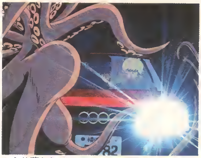
気をおちつけるふたり。ほっとするのもつかの間、車を爆破した時、吹き飛んだドアに寄生していたデーモンが生きていた。触手を伸ばして了をつかまえしめ上げる。はずみでショットガンを手ばなす了。放り出さ

▲しつこく追いかけてくるデーモン。



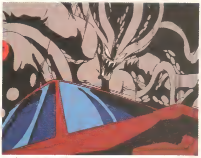
▲車をスタートさせる了。

▲車の下にデーモンが忍び込む。



▲ふり落としデーモンをひき殺そうとする。

▲ガラス越しにデーモンを見て叫ぶ明。



▲車の屋根に飛び乗った。

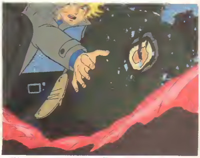
▲車の前方にデーモンが待ちぶせている。

▲「そんな、おれ、できないよ」

▲「つかえ！」ショットガンを手わたす。

▲前からも襲いかかるデーモン。

▲ブキミな液体を吐きだすデーモン。



▲潜んでいたデーモンが車と合体した。

▲かえり血を浴び笑う了。おどろく明。

▲間一髪でショットガンを撃つ了。

れたショットガンをつかむ明。了は明へ撃てと叫ぶ。だが、明はまだデーモンとの戦いに戸惑いを感じていた。デーモンは了を食いちぎろうと引きよせている。叫ぶ了、殺らなければ殺られる、デーモンとの戦いは生か死、以外にない。明はデーモンにギリギリまで走りよりショットガンを撃った。砕け飛ぶデーモン、はじめてのことで興奮のさめない明。そんな明を見て「よくやった」と了はつぶやいた。

▲一瞬で炎につつまれる車。

▲ドアに寄生したデーモンが生きていた。

▲車と合体してしまったデーモンを車ごと焼きはらおうとショットガンで狙いをつける了。

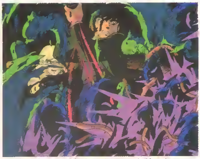
▲それをひろい戦いの決心をする明。

▲はずみでショットガンをはなす了。

▲触手をのばし了と明にからみつく。

▲そんな明へ了は「よくやった」とつぶやく。

▲はじめての体験に興奮している明。


▲ギリギリまで近づきデーモンを撃った。

ふたたび屋敷にもどる了と明。恐怖の遺産のある地下室へいく。屋敷に潜んでいたデーモンに見つかるが了は地下室への分厚いトビラを開き入る。トビラの分厚さにさすがのデーモンも入ってこられない。

「もう、逃げられないんだね」

「ああ」

「受けるよ、その遺産」

すでに落ちつき了と同じく現実としてデーモンを確かめた明は戦うしかないということを知る。

「了、はっきり言ってもらいたい、お前の言う恐怖の遺産がなにかということを。超能力の怪物、デーモンと戦う方法がそんなにあるわけない、ひとつを除いては」

「わかっていたのか…その意味を知りながら、お前は遺産を受けると言ってくれたのか…デーモンと戦う方法、それは自分自身がデーモンになることだ！」

了の父は遺書の最後にデーモンと合体しデーモンの超能力を持ちながらも人間の心を失わない者について書いていた。その者は、デーモンの意識をおさえる強い意志と善良で純粋な心を持ち、正義を愛する若者でなければならなかった。了はいう、だから不動明、おまえを選んだのだと。

「もし、デーモンの意思をおさえられないとわかったら」

「死んでくれ、おやじのように」

「うまくいけば化け物となり死ぬまで悪魔と戦い殺しあわねばならん阿修羅地獄、まずかったら化け物にな

▲急ぎ地下への入口をあける了。

▲屋敷には、まだデーモンが潜んでいた。

▲屋敷へもどる了と明。

▲父の遺書には合体の方法が書いてあった。

▲それは自分自身がデーモンになること。

▲「受けるよ…その遺産」

▲「まさしく恐怖の遺産だな」

▲入れば二度と外へは出られない。

▲鉄の扉の入口へきた了と明。

▲「いこうぜ閻魔、地獄の扉をあけてくれ！」緊張の一瞬に叫ぶ明。

▲「これが地獄の入口、三途の河原だ！」

る我身を焼き殺さねばならんのか」
「しかも、そのふたつを自分では選べない、合体のなりゆきしだいときてる」
「まさしく、恐怖の遺産だな…了はさしずめ、おれを地獄に落とす閻魔大王の役だな、いこうぜ閻魔、地獄のトビラを開けてくれ！」
「これが、地獄の入口。三途の河原だ！」
了の手によって開け放たれるトビラ、明の体に緊張の汗がながれる。

ORIGINAL VIDEO ANIMATION

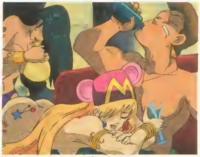
DevilMan

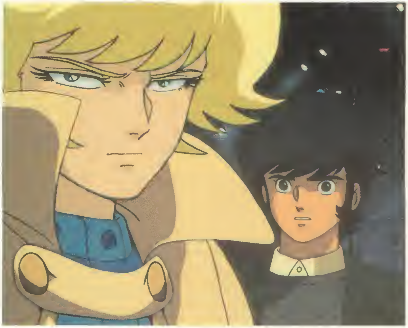
誕生編

デーモンと合体する儀式のはじまり――

▲声たかだかに笑いだす了。

▲明の目に入ったのは踊るチンピラの姿。


●地獄どころか、そこはディスコだった。狂気と快楽におぼれるチンピラ達。


▲怒る明。だが、了は説明する。これは合体に必要なこと。悪魔の儀式には必要なことだと。

だが、そこで明が見たものは、激しいリズムで踊りくるうチンピラの姿だった。地獄と思えばただのディスコで明はあぜんとなる。明を横目に笑いだす了。カッとなり了にくってかかる明。

「なんだよこれ、おれをからかってんのかよ!」

そんな明を無視し、説明する了。

「サバトだ…昔から悪魔に関する儀式はふたつある、ひとつは黒ミサそれにサバト。おやじはふたつの儀式には悪魔、すなわちデーモンが人間と合体しやすい状態があるのではないかと考えた」

「するとこれは合体に必要なことなのか」

「そうさ…あらゆる生物と合体できるデーモンがなぜ人間とは合体しにくいか、それは人間が、デーモンの嫌いなものを持っているからに他ならない、理性だよ、人間がもっとも人間らしく生きるための心、理性。それがデーモンにはたまらなく嫌なのさ。本能を満足させることが、デーモンの生きがいだからな」

人間が理性をすてるときこそデーモンと合体できる。まわりのチンピラは、理性をすて遊ぶことになれている、その中にいれば自分たちも理性をすてやすいだろうと了が集めてきたのだった。そして、彼らは全員合体する。だが了は、彼らにはデーモンのことは教えていなかった。

「たちまち、身も心もデーモンにうばわれ、人間だったときの心をなく

▲とたんに乱闘がはじまり修羅場と化す。

▲チンピラに切りつける了。

▲もうひとつ、デーモンは血を好む。

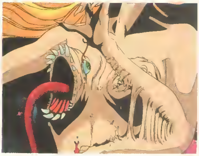
▲デーモンの合体がはじまった。変身していく女。目が飛びだし、口が裂ける。

▲明も乱闘にまきこまれ血を流す。

▲みんなの理性がなくなったとき。

▲チンピラ達は身も心もうばわれてしまう。

▲次々と合体していくデーモン。


▲「ウオオオオオーッ」

してしまう…おれたちふたりがデーモンの体を手にいれたとき、まわり全部が敵となる！」

無謀ともいえる了の考えに明は驚く。

「そんな！　だとしたら…おれたちふたりは、たちまち殺されてしまう。たったふたりで、これだけのデーモンと戦って勝てるわけないじゃないか！」

「だが、勝たなければ意味がない！　考えてもみろ、これからおれたちがやろうとしていることを、たったふたりで無数のデーモンと戦わなければならないんだぞ。このくらいの数のデーモンと戦って負けるデーモンとなら、合体する意味がないんだ。

おれたちふたりがそろって生き残れるとは思えない。もし、どちらかが生き残れたら、生き残れたほうが人類をデーモンの魔手から救うのだ。地球をやつらに渡してはならない」

また激しく音楽が鳴りはじめる。明と了は合体のため理性をすてようと踊りはじめた。突然響く悲鳴。了がくるったようにチンピラをガラスの破片で切りつけている。

「黒ミサが教えてくれたもうひとつのカギ、デーモンは血を好む！」

乱闘がはじまり明もまきこまれる。暴力はきらいだ、ケンカはいやだと叫ぶ明。まさにディスコにいた人間すべての理性がブッとんだと思われたとき、放電が走りデーモンと人間の合体がはじまった。ディスコ内は大混乱となる。次々とデーモンに変身するチンピラ。明が了へかけよる。

ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

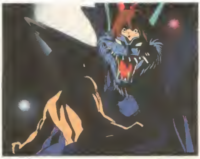
DevilMan

誕生編

明は勇者アモンの体を手にいれデビルマンとなる

▲合体しそこねたチンピラが逃げまどう。

▲まわりをデーモン達にとりかこまれた。



▲逃げだす明の前に一体のデーモンがたつ。

▲了と明も合体することができなかった。

▲真正面で向かい合った明。恐怖で理性のタガが外れ、ただ本能のままに逃げようとする。

「明！　おまえ、体はなんともないのか」

「感じない、なんにも感じない」

「しまった、失敗だ！」

了と明は理性をすてきれず、デーモンと合体することができなかった。いそいで逃げだすふたり。逃げる時、あわてた明はデーモンの真正面に飛びだしてしまう。数体のデーモンに取り囲まれる明。まのあたりに見るデーモン。激しい恐怖で叫び、逃げだす明。

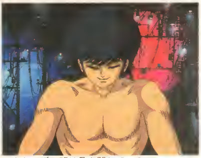
「うわあぁぁぁー」

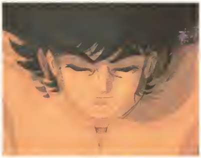
そのとき、明の理性のタガがはずれた。ただ本能のままに逃げようとする。瞬間、明の体にデーモンの意識が飛び込んできた。明の体にデーモンが合体してきたのである。一瞬、体に激しい痛みがはしる。しかし、明はあわてず、目をゆっくり閉じ、呼吸をととのえた。数秒の時間が流れる。明は笑みを浮かべゆっくりと目を開いた。明が変わった、あの優しそうな顔が、変化している。勝ち誇ったように叫ぶ明。

「クックックッ、手に入れたぞ！おれは、悪魔の体を手に入れたぞ」

喜々としてデーモンに変身していく明。目がつり上がり、口が耳まで裂ける。髪の毛が逆立ち、コウモリの形をつくる。ツメが伸び、両腕の肉がバキッと割れ、ひれのように飛びだす。下半身は毛でおおいかくされ、尻尾がはえている。その姿は、凶悪な悪魔そのものだった。

「おれは、デビルマンだ！」

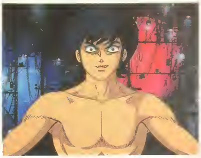

▲あわてず、明は目を閉じている。


▲そのときデーモンが明に合体してきた。

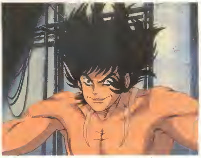
▲ヒュン、ビシッ、ビシッ

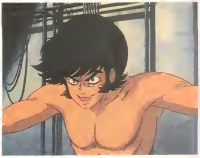
▲ひたいの絆創膏がビシッと飛ぶ。

▲「手に入れたぞ、おれは悪魔の体を」


▲「クックックックッ」

▲バキバキバキッ


▲髪の毛がさかだち、目がつり上がる。


▲勝ち誇ったように変身していく明。

▲「おれは、デビルマンだ！」

▲耳まで裂けた口、不敵な表情。

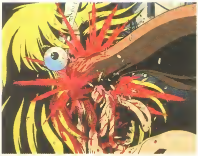
▲変身が終わった。笑うデビルマン

ORIGINAL VIDEO ANIMATION

DevilMan

誕生編

最強の戦士デビルマン誕生…そして負傷する了



●近くにいたデーモンをつかまえ、にぎりつぶしてしまう。あわてるデーモン達。

▲「おまえたちデーモンを地上から抹殺するために生まれた悪魔、デビルマン」

▲「デーモンの体を、超能力を…」

▲「のっとったと、言ってもらおう」

素早い動きで、デビルマンは身近にいたデーモンをつかまえた。強い力でにぎりつぶしてしまった。あわて、ざわめくデーモン。

「なにをするアモン!」

「血まよったかアモン!」

デーモンを見すえ、うれしそうに叫ぶ明。

「おれはアモンではない。おまえたちデーモンを地上から抹殺するために生まれた悪魔、デビルマン!」

ことを認識したデーモン。

「人間に意識をのっとられたのね」

「のっとったといってもらおうデーモンの体を、超能力を!」

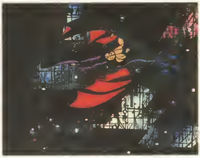
誇らしげに話す明。

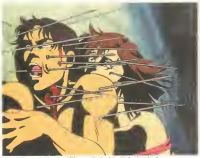
デーモンの群れに突っこんでいくデビルマン。迎え撃つデーモン達。だが、勇者アモンが合体した不動明の前に、ただ屍の山をつくるだけだった。次々とデーモンを殺してゆくデビルマン。その姿は殺戮によろこびを感じているようで喜々としている。その姿を見た了のなかに、恐ろしい考えが浮かんできていた。

「あれが…あれが本当に明なのか、あの優しく、臆病な不動明なのか? 戦いを楽しみ、殺戮によろこびを感じている。おれにはやつが、デーモン以上の悪魔に見える、悪魔のなかの悪魔だ! ひょっとしておれは人間の味方をつくろうとして、最大の敵を作ってしまったのではないか」

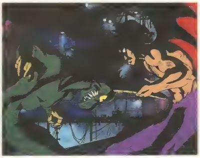
明、いやデビルマンがうれしそうにデーモンを殺してゆくさまを見て了は不安と恐怖におびえた。

▲次から次へとデーモンを倒す。

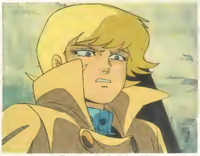

▲ウイングをたして飛行するデビルマン


▲デーモンとの戦いでまきぞえをくう。

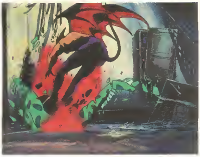
▲「クアアー」力まかせに投げるデビルマン。


▲「シタタタタタタタッ」ガキッとうける。

▲デビルマンへデーモンが襲いかかる。


▲そんな明を見て了は不安におびえている。

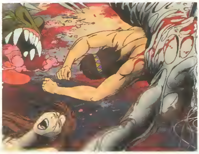
▲殺戮によろこびすら感じているようすだ。


▲上から下へ叩きつける。飛びちるデーモン。

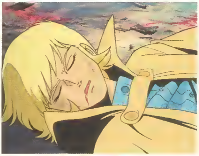
▲「ひょっとしておれは、最大の敵をつくってしまったのではないだろうか」恐怖する了。

▲「やつがデーモン以上の悪魔に見える」

▲「悪魔のなかの悪魔に！」



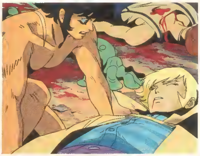
▲残骸の中、了をさがす明。



▲下敷きになり重傷の了を発見した。

▲戦いが終わり静寂がその場を支配していた。変身をとく明。まわりはデーモンの残骸だらけだ。

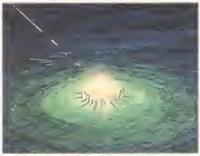
▲「おれひとりをこの地獄へおいていく気か…了！」明は了を抱き上げて地下室の中で叫んだ。



▲残骸をどけ、呼びかける明

▲ぐったりする了「死ぬなー、了！」

▲地球からの信号は宇宙の彼方へ送られた。



▲光の球体が神の星へ信号を送っている。

戦いが終わりデビルマンから人間にもどる明。その場所には、無数のデーモンの残骸がちらかっている。
「そうだ、了…了も合体していたとしたら、気づかずに殺してしまったかもしれない」
デーモンの残骸の下敷きになってたおれている了を見つける。
「了、おれひとりをこの地獄へおいていく気か、了…死ぬな了！」
了を抱きかかえ、誰もいなくなった地下室で、ひとり明は叫んだ。

DEVILMAN FILMSTORY
ORIGINAL VIDEO ANIMATION

妖鳥シレーヌ編

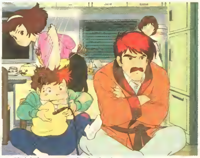
ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

妖鳥シレーヌ編

明は母への思いをふりきりデビルマンとして戦う

▲「はい、牧村です…だれだ！」



▲牧村家の平和な夕食後。

▲「明…どうしちゃったの……」

▲ようすの変な明を心配する美樹。

▲電話の呼び出し主のもとへ走る。

▲夜の街、高層ビルの間を飛ぶ明。

▲街のあかりに、ふと気をとられている。

▲悪魔の本体を持つ明。けた外れの跳躍力。

デーモンの人類抹殺が静かにはじまっている。人々はデーモンの存在など知らず、平和な日々を送っている。しかしデーモンは確実に人間の生活をおびやかしているのである。

いつもと変わらぬ平和な牧村家の夕食後、タレちゃんはファミコンをやり、美樹は奥の台所で食器を洗っている。そこへ電話がかかってきた。ファミコンに夢中のタレちゃんは電話にでようとしない。美樹、あ～あしょうがないという感じで奥からでてくる。タレちゃんの後ろを通りつつ、頭にひじてつをくらわせた。わめくタレちゃん。まだ鳴っている電話のベル。急いで電話に出ようとする美樹。だが、鳴りつづけるベルの音に明が電話に出てしまう。

「はい、牧村です」とたんにけわしくなる明の表情「誰だ！」

「デビルマン…不動明…来い、来い」

電話をきり深刻な表情で部屋へもどる明。美樹の呼びかけにも答えず階段をのぼっていく。

「ねえ、なにかようすが変だよ」明の部屋へいく美樹、だが部屋の中には誰もいなかった。窓が開きカーテンが風にゆれている。つぶやく美樹。

「明…どうしちゃったの？」

明はビルの谷間を走っていた。ビルからビルへ跳び移る明。そして、明の来た場所は夜の川だった。頭上の陸橋をやかましく電車が通りすぎる。脇に巨大な下水口があり、その奥は闇につつまれている。明は歩みだし闇の中へ消えていった。下水の

▲前に浮かぶ女の顔が明に危険を警告する。

▲「出てこい！　ジンメン！」叫ぶ明。

▲陸橋の袂、夜の川へきた明。目の前には巨大な流入口がある。その中へ入っていく。

▲恐怖の甲羅を誇らしげに明に見せるジンメン「美しいだろう…すばらしいだろう…」

▲「お気にめしたかね、私の美しい甲羅は」

▲甲羅を見て恐怖し叫ぶ明「うわああー！」

交差点へやって来た明。なにげなく足をふみおろすと〝ベキン〟と音がひびく、下を見ると人骨が散らばっている。少しあわて、後ずさりする明。見ると泥水の中を人骨が点々と続いている。

「やな、雰囲気だぜ…」つぶやき、また歩きだす。突然、足もとがくずれ大きく開いた穴の中へ落ちてしまう。そこは地下鉄の廃駅だった。大きな水たまりがある。水のはねる音が聞こえている。明、見わたして叫んだ。

「出てこい！　ジンメン！」

闇の中、大勢のうめき、叫び、呪いの声が聞こえてきた。前でなにかが動いた。目をこらす明。闇に霧が見え、しだいに人の顔になっていった。それがはっきり見えたとき明は驚いた。そこには母の顔があったのだ。

「バカな！　母さんは氷河で死んだはずだ」

グッと感情を殺し否定しようとする。目がなれると、周りにいくつもある顔がはっきりと見えてきた。そのひとつひとつが叫びをあげている。その中からジンメンが現れた。

「カッカッカお気にめしたかね不動明、いやデビルマン！　私の美しい甲羅は…」

「甲羅？」

「わからないか…そうか、わからないか…ならば、もういちど見るがいい…」

目をこらす明。それは、人間の顔が浮かんでいる呪いの甲羅だった。

▲母の視線に気づき、変身を中断する。醜いデーモンの姿を見せることを明はためらう。

▲怒りにまかせ変身しようとする明。

▲甲羅の母が明を見ていた「あ、明！」

▲さすがにたまりかねて光線を発射する。

▲卑劣にも甲羅で光線を受けるジンメン。

▲変身できない明へジンメンの容赦ない攻撃が加えられる。明はただ受けているだけだ。

おどろき叫ぶ明。そんな明を見てジンメンはうれしそうに話し始める。

「おれが人間を食うと、甲羅のコブのひとつひとつが食われた人間の顔になるのさ…おれに食われた悲しみが…おれに食われた怨念が…背中の甲羅にうかびあがるのさ。すばらしいだろう…なにしろ、ざわめき、叫び、うらみごとを言うからなぁ〜〜〜おまえの母親は、ほ〜ら、まん中あたりにいるだろう、カカカカ…」

怒りをこめて叫ぶ明。

「ジンメン！　これほど、おまえたちデーモンがニクイと思ったことはないぞ！」

そんな明を見て、さらにうれしそうにするジンメン。

「そうか、ニクんでくれるのか、ニクめ、ニクむがいい…ニクしみを受けるのは、デーモンのほこりだよ。強いやつほどニクまれるからなぁ」

怒りがこみあげ、叫ぶ明。

「ゆるさん！　ジンメン！」

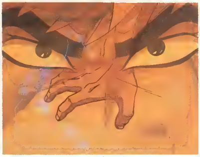
変身しようとする。だが、甲羅の母が目を開き明を見ている。それに気づいた明。

「見るなァ！」

とっさにジンメンに背中を向け変身を中断してしまう。そんな明を見てバカにするようにジンメンは話す。

「カカカカ…見られるのは嫌か…醜いデーモンの姿を、おまえの本当の姿を…カカカカ…」

ジンメンの手がすうっと伸び、明をはじき飛ばした。コンクリートの壁に叩きつけられる明。生身の明にジ



▲明の怒りのエネルギーがはじける。

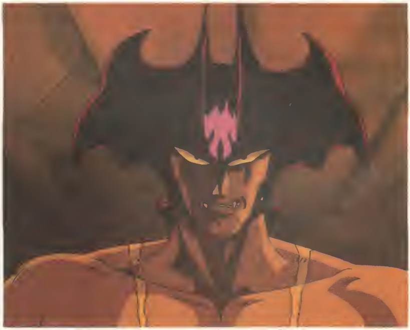
▲「きさまはひどい奴だなァ〜」

▲顔たちの悲鳴を聞き、攻撃をためらう明。

▲「怒りの姿だ！」明はいっきに変身した。

▲「見るがいい…これが、おれの！」

▲変身する一瞬、気をためこむ明。



▲ジンメンを倒すため母の目前にもかかわらず変身した明「ジンメン、キサマを殺す！」

▲甲羅の母が明の姿に目をみはっている。

▲黒い煙の中から現れるデビルマン。

ンメンは容赦のない攻撃を加える。明はすばやい動きでジンメンの攻撃から逃れようとする。しかし、ジンメンの腕は伸縮自在、明もかわしきれずに苦戦する。クソッとばかりにジンメンへ光線を発射する。だが、ジンメンは背中を向け甲羅で光線を受ける。無残に切り裂かれた甲羅の顔、悲鳴がひびき、顔が、やめろ、助けてくれ、と叫ぶ。それを聞いてしまった明は攻撃をためらう。

「カカカカ…きさまは、ひどいやつだなァ〜甲羅になったとはいえ、まだこいつらは生きているのと同じなんだぞ、自分の意識を持っているからなァ〜」

うれしくてしようがないようすのジンメン。明は怒りで唇をふるわせている。

「おまえは、人間を殺したんだ。さァ〜もっと殺せ、人間を、どんどん殺すがいい…人間を…」

のらりくらりと明を挑発するジンメン。

「きさま！　よくもヌケヌケと」

「おまえにくらべれば、おれは善良なもんだ、なにしろおれは食っただけだからなァ〜。人間の感覚じゃ、生き物を食うのは悪いことじゃない。そ〜だろォ。だが、殺すのはいけないなァ〜、生き物を殺すのはいけないことだ、な、な、そ〜だろォ…」

ついに明の怒りは頂点に達し、母の目の前で変身してしまう。

「見るがいい、これがおれの怒りの姿だ！　ジンメン、きさまを殺す！」

▲ひるむデビルマンを水中へひきずりこむ。

▲デビルマンに甲羅を向けるジンメン。

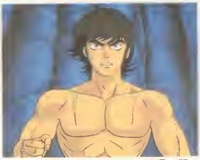
▲「できるかなァ〜」笑うジンメン。

▲変身しても超能力を使うことができず、ただジンメンのなすがままのデビルマン。

▲ジンメンに腕を食いつかれるデビルマン。

▲甲羅の顔を気にして攻撃できない。

▲「ククッなにひとつ抵抗できないとはな」



▲思いをふりきるように母の死を見る明。

▲そんな明へ母は自分の死の記憶を見せる。

挑発的に笑うジンメン。

「できるかな〜人間の心を持ったおまえに」

スッとジャンプしてジンメンの前に立つデビルマン。ジンメンは、すかさず甲羅をタテにする。甲羅の人間の顔と向きあい、ひるむデビルマン。

「カッカッカッ人間の心とは弱いものよ、悪魔の超能力を持っていても、それでは使えまい。どんなすぐれた超能力も、使えなければおしまいだなぁ〜」

笑うジンメン、腕をのばしデビルマンを大きな水たまりにひきずりこむ。甲羅が気になって攻撃できないデビルマン。そんなデビルマンへ母は語りかける。

「おまえに力があるのなら、母さんの心をのぞいて明！」

フト気がつくと明は母の記憶の中にいた。母はジンメンに食われた時の記憶を明に見せる。

「わたしは死人…わたしは死んだの、腕がちぎられ…血がふき出し…化け物の手がわたしの体を引き裂いた」

残酷な記憶を見せられ目をおおってしまう明。

「やめろー！　なぜこんなものを見せる、見たくない！」

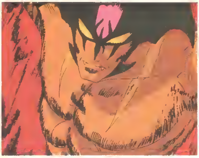
明は目をふせたまま見ようとしない。だが、そんな明に母はきびしく言う。

「見なさい、認めなければおまえは戦えない！　明」

なにひとつ抵抗できないデビルマンに勝ち誇るジンメン。

「キサマもおれの甲羅にくわえてや

▲母の顔が一瞬、微笑みを見せる。


▲母への思いをこの一撃にこめる。

▲つらい決断をしたデビルマン。

▲甲羅をはがされ、内臓があふれる。

▲「だが！　きさまも死ぬんだろ！」

▲「やめろ！　甲羅をはがすと全員死ぬぞ」

▲ジンメンの固まっている甲羅。母は安らかな顔をしていた。ようやく立ち上がる明。

▲激情にかられて拳を叩きつける明。

▲悲しみで明の目から涙がこぼれている。

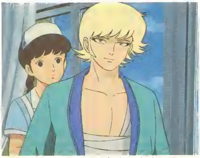
る」
とどめをさそうと甲羅を変形させ、体あたりをかけようとしている。ふたたび明へ叫ぶ母。
「わたしは死人。死んでいるのよ」
母の叫びに明は、母への思いをふりきった。
「うわアアアァー」
叫ぶデビルマン、突っ込んできたジンメンをかわし、甲羅の母の顔へ腕をふり下ろした。一瞬母の顔が微笑んだように見えた。甲羅が砕け大量の血があふれる。反撃にあいあわてるジンメン。デビルマンを見失い、あたりを見まわして叫んだ。
「どこだぁーデビルマン！」
デビルマンは、ジンメンの背後から、そっと忍びより満身の力をこめ、甲羅をはがしにかかった。
「やめろ！　やめてくれ！　甲羅をはがすと全員死ぬぞ、全員死んじゃうったらァ〜」
「だが、きさまも死ぬんだろ！」
さらに力を加えるデビルマン。
「グギャ〜ッ！」
甲羅がはがされ、内臓が飛び散る。ついにジンメンは絶命する。
明が水の中から出てくる。戦いには勝った。だが、今の明はやるせない気持ちでいっぱいだった。反狂乱になって辺りのコンクリートに怒りをぶつける明。崩れるようにかがみこんだ明の目からは涙が流れていた。
ジンメンの甲羅は人の顔をキザんだまま固まっていた…ジンメンの甲羅、それは悲しみのデスマスク…。

ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

妖鳥シレーヌ編

了が語るデーモン天敵説 明にはショックだった


▲驚異的な回復力で元気なようすの了。

▲了の病室をさがしている明。

▲デビルマンになってからの自分の変化や体調を了に話す明。以前より凶悪な感じの明。

数日後、明は了を見舞いに病院へ行った。了の父が残した「恐怖の遺産」デーモンと合体するための儀式の時、了は合体できずに、明とデーモンの戦いにまきこまれ重傷をおったのである。病室に入った明は、了が思ったより元気なようすで意外に感じた。うれしそうに話す了。

「自分でも信じられないくらい治りが早いんだ。医者もおどろいてる」

ふたりはかるく近況を話したあと、明はジンメンとの戦いのことを了に話した。

「おれがデビルマンにならなければ母さんもあんな死に方をせずにすんだかもしれない…」

話を聞き了は、強い口調で明に言う。

「バカな！　だいいち、おまえの母親がデーモンに食われたのは合体以前のことだろう、なにもかも自分の責任にするのはよせ」

わかってねえなアという表情の明。

「フン！　そうだろうな…」

了と明の間には、この数日でデビルマンになった者とそうでない者のズレが生じてきているようだった。

「正直いうとな、こんどの事件でなにかこう…フッきれたような感じがするんだ」

明の言ってることがわからずに戸惑う了。そんな了を見る明。

「わかんネェか…」

つぶやくように言った。

「どうせ…どこかで決着をつけなきゃならなかったんだ……」

明をじっと見ていた了は、ため息まじりにつぶやく。

「おれたちの戦いに、勝利はありえないのかもしれない…デーモンにとって人間を食らうのはあたりまえの感覚か…」

そのとんでもない発言に過敏に反応する明。

「どういうことだ！　おれたちの戦いが、デーモンと合体したことがムダだというのか！」

明は、デビルマンになった自分の存在を否定されたような気になり、了につかみかかっていく。ベッドへ倒れ、むせながら激しい口調で言う了。

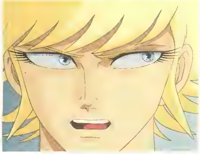
「そうじゃない！」

説明する了。地球上のあらゆる生物には天敵が存在する。草食動物が草を食い、そいつを肉食動物が食う。だから、片方だけが爆発的にふえたりすることはない。天敵の存在が自然界のバランスをたもっている。しかし、人類には人間をエサとして食らう天敵がいない。これは、実におかしなことではないか？　これまで

▲人類が歴史の中からつくりあげた兵器。

▲明を横目に不安なことを口走る了。デーモンは、今の人類や自然には必要かもしれない。

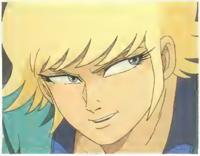
▲ベランダで話しつづける。



▲デーモン天敵説を明に話す了。

▲デビルマン抹殺のために現れたシレーヌ。

▲了は明のほうをチラッと見て言う。



▲「だが、時は人類に味方した」

は、人間があふれていたとき人間同士の共食い、つまり戦争によって人口の調節を行ってきた。しかし、兵器の発達した現在、少しのことでは戦争などできない。そこで、腹を空かせたデーモンが人間を食い人口問題は解決、自然界のバランスも保たれるのではないか？

「人類の天敵がデーモンだっていうのか」

了のデーモン天敵説に納得いかないようすの明。何かを言いかけるが、言葉が見つからず声をつまらせている。話をつづける了。

「だがな…時は人類に味方した。デーモンが氷に閉じこめられている間に、人間は力を手に入れた…デーモンに対抗しうる力をな…」

チラッと明のほうを見る了。えっ、おれ？　という感じの明。離れかけたように思われた明の気持ちを上手にコントロールしてしまう了。アメとムチのような話の流れにきげんをなおす明。

「おれたちの戦いは、ムダじゃないんだな、デビルマンはデーモンの天敵、デーモンハンターってところか」

ふたりが病院で話している時、早くも次のデーモンが、デビルマンを抹殺するために送られてきていた。霧がきれ、暗い星空の中、月の光を浴びたシレーヌが飛ぶ。

「デーモンの秘密を知り、デーモンの能力を得た不動明、いやデビルマン！　地をはう虫ケラどもに味方するおまえを…生かしておけぬ！」

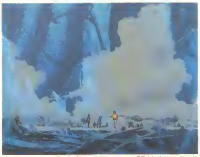
ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

妖鳥シレーヌ編

シレーヌがはなつ刺客―アグウェルとゲルマー

▲記憶の中をさまよう明。


▲その日、見た夢はアモンの記憶だった。

▲夢の記憶に恐怖した明は飛び起きた。

▲目の前に巨大なデーモンが現れる。

▲そんな美樹をからかう明。

▲美樹が明を心配して来ていた。

▲シレーヌに呼び出されたゲルマー。

▲怒る美樹「ほっとけーバカヤロー／」

その日、明は夢を見た。それはアモンの記憶だった。そこには巨大なデーモンが存在し、アモンはそのデーモンに恐怖していた。あせだくで起きる明、いままでの光景が夢であることを知りため息をつく。

「明くん！」

いつのまにかベッドの脇に美樹がきている。

「すごい声だったよー」

心配そうに明をのぞきこむ美樹。

「夢を見たんだ…」

「怖い夢？」

「ああ…」

「怖いなら一緒にいてあげようか」

「まずいんじゃない、おやじさんに殺されちゃうよ」

テレ笑いの美樹。

「ヘヘッジョーダンよ、決まってるじゃない」ピョコンと立ち上がって

「汗かいたんならお風呂はいんなさい」

「めんどくせえよ、そんなに毎日はいってたらフヤケちまう」

「きったね～私なんか毎日はいったってフヤけやしませんよ～」

「フヤけてるじゃね～か、プク～ンとさ」

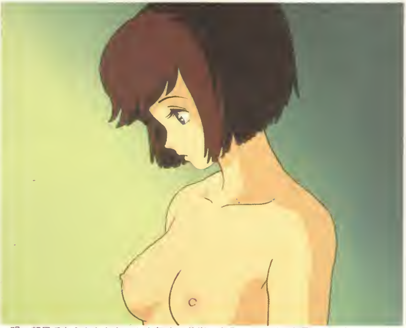
胸を指してからかうように美樹を見る明。少しはロマンチックなことでも言ってくれるかと、期待していた美樹、本当に怒ってしまう。

「ほっとけーバカヤロー」

部屋でひとり笑う明。明がこうした楽しい時をすごしているあいだにもすでにシレーヌは牧村家にいた。戦

▲屋根の上で戦いのときを待つシレーヌ。

▲デビルマンとの戦いの前に不安がよぎる。



▲明の部屋でからかわれたことを気する美樹。自分のオッパイを見てつぶやいている。

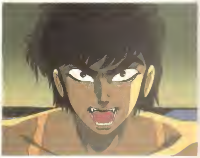
▲なにも知らないのんきなタレちゃん。

▲屋根の上で戦意を高めるシレーヌ。

▲エッチな想像で、ひとりテレてる美樹。

▲「この屋敷に呪いと災いを！」

▲風呂場に潜むゲルマー。美樹が危ない！



▲明の悪魔の血が戦いを知らせている。

いの準備を着々と進めている。両手を高だかとさし上げデーモンをよび出す。

「いでよアグウェル、ゲルマー」

雷がとどろき雨がふりだした、雷に照らし出されるとゲルマーがいる。水音と共に牧村家へ潜入する。美樹、お風呂に入ろうとパジャマを脱いでいる。鏡を見ながらリボンをはずして明の部屋でのことを思い出してムクれている。ふり向き鏡に背を向ける美樹。鏡の中にはゲルマーが潜んでいた。気づかずにさっさと浴室へ入ってしまう美樹。外では激しい雨が降りつづいている、雨にうたれているシレーヌ。

「私は勝てるだろうか…地獄の野獣と呼ばれ、恐れられたアモン…その勇者アモンに不動明の強靱な意志が加わり超悪魔と化しているという…恐れるな…恐れるなシレーヌ」

デビルマンとの戦いに迷いが生じる。

「私とて、数多くのデーモンをこのツメで引き裂いたではないか！どれほどのデーモンが、おのれの能力の未熟さを呪い血の海に沈んでいったか。私は強い！　私は勝つ！　アグウェルとゲルマーが私に勝機をあたえてくれる」

自分の力を誇示し戦意を高めるシレーヌ。その時、明の悪魔の血は不穏な気配を感じていた。緊張が頂点に達した時、タレちゃんの悲鳴が響いた。瞳を閉じ戦いの時を待っていたシレーヌ、翼を広げ叫ぶ。

「この屋敷に呪いと災いを！」

▲病院のベッドで明の異変を感じる了。

▲カベにめり込んでいるおじさん。

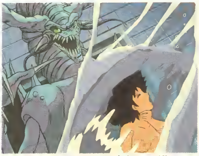
▲悲鳴を上げ階段を登って来るタレちゃん。

▲助けようと風呂場へ急ぐ。

▲美樹の悲鳴に気づく明。

▲ゲルマーが姿を現し美樹を襲う。

▲光線をはなつ明。ひるんだゲルマー。


▲「おまえと戦えるとはうれしいぞ！」

▲からんでくるアグウェルを撃退した。

▲天井をブチ破り美樹をかかえて逃げる明。

▲水に姿を変えてゲルマーが明を襲う。

▲そのスキに美樹を助け出す。

部屋のドアを勢いよく開き、とび出てくる明。

「戦いのゴングだ！」

明は用心深く部屋を調べる。タレちゃんは部屋でふるえている。おじさんとおばさんの部屋では、すでにアグウェルの超能力にやられたふたりがいた。それを見た明。

「きっと…助けます」

もうしわけなさそうにつぶやく。ハッとしてもうひとりの存在に気がついた明。

「美樹ちゃんは…」

浴室で突然悲鳴をあげる美樹。

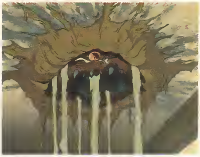
「しまった！」

美樹は水の中へひきずりこまれようとしていた。水柱が上がりゲルマーの姿になる。あわてて風呂場へ向かっている明。ドアをブチやぶって助けに入ろうとする。しかし、もう1体、潜んでいたアグウェルが邪魔し浴室へ入れない。中では水柱が激しく上がり、その中に美樹がとらえられている。アグウェルを撃退し、飛び込み叫ぶ明。

「ゲルマー！」

「おぼえていたかアモン！　お前と戦えるとはうれしいぞ！」

水を打つゲルマー、明はその水圧でブッ飛ばされる。しかし、光線を放ち、ゲルマーがひるんだスキに美樹を助けだす。ゲルマーは怒り、波に姿を変えてせまってくる。それをかわして逃げる明。再びアグウェルの触手につかまってしまう。だが明は、逆にアグウェルをシメ上げ、引きチ

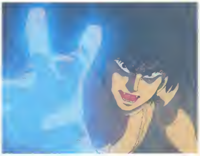

▲結局やられる「先に地獄で待ってるぜ」

▲かえって明の怒りをさそってしまう。

▲またアグウェルがしつこく襲ってくる。

▲水分が蒸発し、エネルギーを失った。

▲シーツについた火で苦しむゲルマー。


▲ジンメン戦でおぼえたワザをつかう明。

▲凶悪な悪魔の本性を持つ明、闘争本能のままに戦い、よろこびすら感じているようだ。

▲明は、ゲルマーをなぶり殺しにする。

▲シメ殺し、その残骸を踏みつける。

ギーてしまった。部屋へもどり気絶している美樹をベッドへ寝かせ まってくるゲルマー。ドアを木土てブチ破り現れる。明はすかさずシーツをとり、手から発した高熱で火をつけこれを迎えうつ。炎にさらされゲルマーのエネルギー、水が蒸発しはじめた。苦しそうにのたうちまわるゲルマー。明は、さげすむようにゲルマーを見下ろす。

「水分を失ったその体で、どんな力を発揮できる、やってみろ…水のエネルギーを借りなければ何もできない無能力者め、思いしらせてやる」

ゲルマーに向かってダッシュする明、パンチを浴びせまくる。ゲルマーはまるで踊っているように見える。水分を失ったゲルマーは、ただみじめなばかりだ。明はゲルマーのナマコ腹に手を突っ込んで切り裂いてしまう。血がふきだし、のたうちまわるゲルマー。その首を引きよせ満身の力をこめてシメ上げる明。ピクピクしだすゲルマー、とうとう絶命する。明は残骸を踏みつけ、あざけるように笑った。ふと、横のベッドで寝ている美樹に視線をうつす明。

「美樹ちゃん…見ていなかったろうな」

心配そうにつぶやいた。明は美樹に凶悪な自分の悪魔の本性を見せたくないのだ。寝ているのを確認してホッとする明。汗をふこうとして、手にベットリついているゲルマーの血に気づき、おどろいてふりはらおうとする。

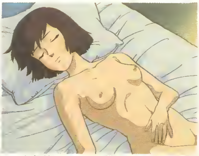
ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

妖鳥シレーヌ編

巨大なシレーヌのツメが明のスキをつき襲う

▲手についたゲルマーの血をふりはらう明。


▲まだ気絶しベッドで横たわっている美樹。

▲「勝った！　私の勝ちだデビルマン」

▲突然、屋根をブチ破りツメが明を襲う。

▲「アグウェルとゲルマーを倒し、気をぬいた瞬間が私のねらいだったのさ！」

「美樹ちゃん勝ったよ…」
つぶやく明。その瞬間、屋根をブチやぶってシレーヌの巨大なツメが明をとらえた。裸の上半身にガッチリツメがくいこむ。悲鳴をあげる明。シレーヌは歓喜にみちた表情で上空へ舞い上がる。
「勝った！ 私の勝ちだデビルマン、アグウェルとゲルマーをたおし、気を抜いた瞬間が私のねらいだったのさ」
変身しようとする明。だがデビルマンに変わることができない。
「変われない、悪魔の本体に！」
嬉しそうに教えてくれるシレーヌ。
「フフフ…私のツメから流れる電流が、おまえの機能を狂わし、あらゆる超能力を、ふうじているのさ…私のツメからのがれた者はいない…」
「力を出せぬ以上、おれに勝ちめはねえ、殺せ！ 敗北の屈辱で心がズタズタになる前に」
「だまれ！ おまえがほこり高いデーモンの戦士ならそうしよう。だが、おまえはちがう、美しい地球のゴミタメにうごめき生きる虫ケラ、人間だ！ 人間に心をうばわれ人間に味方するおろか者め！ 虫ケラにふさわしい死にかたをさせてやる」
シレーヌの話にガクゼンとする明。だがその時、明の危機を直感した了は病院をぬけ、車を走らせていた。建設中の新宿都庁、その最上階の鉄骨へ登りライフルのボルトハンドルを引いた。明は前方になにか気配を感じて見ている。

▲シレーヌに見つかりツメを食らう了。

▲明の危機を救うためライフルを発射した。

▲新宿都庁の最上階に了が現れた。

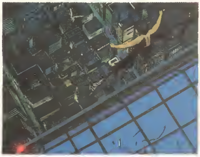
▲低空飛行でシレーヌに隠れて移動する明。

▲下へ落ちる明へ向かって、砕け散れ！　といわんばかりにPK BOMを撃つシレーヌ。

▲明を見つけガラスの破片の雨をふらせた。

▲気の高まりからいっきに変身した明。

▲シレーヌを見すえる明。気を高めている。


▲攻撃をかわしてシレーヌの上空へでる。

「了か？」

シレーヌもなにか気配を感じて見ている。と同時にライフルの弾丸2発がシレーヌをつらぬいた。思わず明を離してしまうシレーヌ。前方をにらみ了を見つけ、鋭いツメを発射した。

「人間め！」

正面からツメをくらい、鉄塔へ激突する了。上空から離され落ちる明。ウイングを出し飛行する。それに気づいたシレーヌ、左手のPKBOMを明へ向け発射する。間一髪でよけた明。それはトラックに命中し爆発する。その爆発にまぎれて身を隠し、低空飛行で移動をつづける明。シレーヌを下から見ている。

「やってくれるぜ！」

つぶやくと同時にシレーヌの死角をつき、いっきに上昇する明。シレーヌは頭部の触角をレーダーにして明を探す。見つけるとすかさず攻撃してくる。それをかわして上空に出る明。両者は上空で向かいあった。

「虫ケラと言ったな！　人間をゴミタメにうごめく虫ケラだと！　その虫ケラの力が、どのようなものか……見るがいい！」

いっきにデビルマンに変身する明。

「アモン…」

かつて恋人だった者の姿を見つめるシレーヌ、うつむきかげんで目をとじる。数秒の時が流れる。そして強い視線でデビルマンを見すえた。

「こいデビルマン！　きさまを、百の肉片に引き裂いてやる！」

ORIGINAL
VIDEO
ANIMATION

DevilMan

妖鳥シレーヌ編

かつての恋人？ アモンとの戦いが開始された

▲デビルマンを見るシレーヌ。つぶやきをもらすその内には、さまざまな思いが去来する。

▲思いを振りきるようにデビルマンを見る。

▲瞳を閉じそのままの姿勢のシレーヌ。

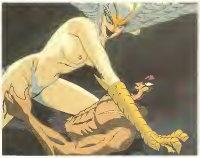
▲シレーヌのツメがデビルマンを襲う。

▲戦いがはじまる。激突をくりかえす両者。

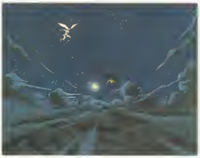
シレーヌを見すえ叫ぶデビルマン。
「きさまの超能力が上か、おれの超能力が上か！　勝負！」
2体のデーモンが戦う。組み合うたびに、シレーヌの羽が舞いちる。上昇するシレーヌ、追うデビルマン、雲の中へと場所を移した。デビルマンはシレーヌの頭上から急降下し踏みつける。苦しみのあまり、うめくシレーヌ。だが、スッとシレーヌの体が消えた。
「チッ！　テレポートで逃げやがったな」
くやしそうに舌打ちするデビルマン。
戦いの場所は、新宿副都心から川沿いの村へ移っていた。シレーヌを見失ったデビルマンは近くの村へおり、まわりを見わたすがシレーヌの気配はどこにもない。
月を背にし、現れるシレーヌ。テレポートでデビルマンの猛攻から逃れたシレーヌは、とっておきのワザをデビルマンにみまおうとしていた。地上にいるデビルマンのまわりでカタカタ音がしはじめる。しだいに数をまし、音は高くなっていく。そしてデビルマンを取り囲むように舞いはじめるチリやホコリ。その異変に気づき、逃げようとするデビルマン。だが、すでに遅いようだ。超圧力がデビルマンを襲う。圧縮された分子が熱を持ちはじめる。道路の標識はグニャグニャにつぶれている。そのようすを笑みを浮かべ見ているシレーヌ。
「原子の炎で焼かれるがよい！」

▲ひるんだデビルマンに馬乗りになる。

▲雲にまぎれ上空より急降下するシレーヌ。



▲シレーヌの猛攻がつづく。



▲戦いの場所がつぎつぎと変わる。

▲「落ちろ！」PK BOMを撃つシレーヌ。

▲突然、ジャンボ旅客機の目前に現れる。

▲落下するのを体を開き止めるシレーヌ。

▲そこを上空から踏みつけるデビルマン。

▲デビルマンはしつこいシレーヌの足をつかまえると力まかせに投げ飛ばす。

結界の中では超上力のために核爆発がおこった。もうもうと舞い上がる煙。だが、煙の中からこちらへ飛行してくる物体があった。

「シレーヌ！」

あの爆発の中、デビルマンは生きていた。思惑がはずれたシレーヌ、信じられないという表情。そこへ叫びながら近づいてくるデビルマン。

「テレポートはきさまだけの超能力じゃねぇ！」

あわて逃げるシレーヌ。しかし、逃げながらも冷静に精神を集中し、新宿で了にはなったツメを呼び戻していた。戦いは、力で上回るデビルマンが少しずつシレーヌをおいつめていた。凶悪なデビルマンの前では、なすすべがないシレーヌ。余裕を持ちはじめるデビルマン。笑みを浮かべて近づいて行く。そのとき上空からブーンという音が響いたと同時にシレーヌのツメがデビルマンの左腕を切り落とした。悲鳴をあげるデビルマン。シレーヌは待っていたのだ、ツメが戻ってくるのを。触角によって自在にツメをコントロールするシレーヌ。いっきに形勢は逆転した。

今度はシレーヌが笑う。

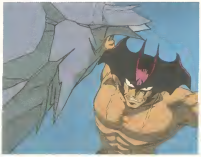
「フフフ…みじめだなデビルマン、じわじわと料理してあげるわ」

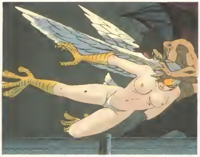
しかし、デビルマンはシレーヌの頭上で動く触角を見逃さなかった。そこでコントロールしていると気づいたデビルマン、自分の触角を伸ばしシレーヌの触角へからめて電撃をくらわす。とたんにツメのコントロー

▲舞いちるゴミの中から現れるデビルマン。

▲張った結界の中で超圧力がかかる。

▲シレーヌは必殺技を出そうとしている。


▲物体をあやつり攻撃するシレーヌ。

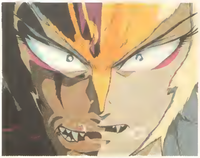

▲デビルマンに体当たりをくらわせた。

▲バカなっという表情のシレーヌ。

▲ツメが戻って来るのを待っていたのだ。

▲だが、シレーヌのツメが腕を切り裂いた。

▲力で勝るデビルマンが優勢になってくる。


▲勝負の瞬間、両者の表情が交錯する。

▲シレーヌの触角に電撃をくらわせた。

▲血を吐き、切り裂かれるデビルマン。

ルを乱すシレーヌ。

「クックックッどこへ飛ばしている、コントロールが乱れたぞ」

笑うデビルマン。あせったシレーヌ長期戦は不利と見て勝負にでてくる。たがいに触角をからめたまま。高速で回転しているツメが近づいてくる。精神を集中するシレーヌ。ふたりの表情が交錯する瞬間、悲鳴が響く。シレーヌの頭上を飛ぶデビルマン。デビルマンに避けられたツメは、シレーヌの腹に深々と突き刺さっていた。

「どうだ、自慢のツメの味は、テメエでくらうのは、はじめてだろう」

「よくも…よくもやったなデビルマン」

血を吐きながらデビルマンをにらむシレーヌ。

「てめえの負けだ！」

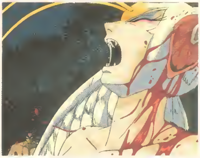
せまるデビルマン。シレーヌに飛びかかり、頭部の羽を力まかせに引きチギってしまう。血が飛び、悲鳴をあげる。死を間近に感じたシレーヌは森から走り出てきて、助けを求め星空へ叫んだ。

「ゼノン様！　助けて、ゼノン様！このままでは死にきれません。デビルマンを打ち倒すお力を！　ゼノン様！」

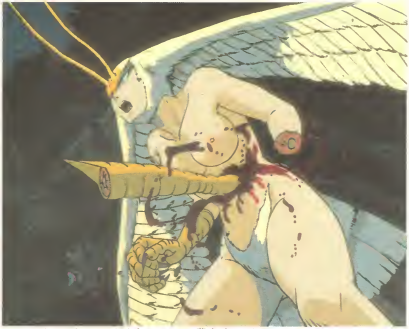
シレーヌは最後のチャンスをゼノンに懇願する。暗い雲の中、イナズマとともにゼノンのシルエットが浮かびあがった。岸辺に雷が落ち、光の中からカイムが現れた。

「シレーヌおれの体を使え合体だ」

▲羽をつかみ力まかせに引きチギった。



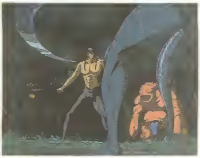
▲悲鳴をあげ逃げるシレーヌ。



▲ツメを自分で食らってしまうシレーヌ。悲鳴がひびく。

▲「シレーヌおれの体を使え、合体だ！」

▲落雷の中よりカイムが現れる。



▲有象無象のデーモンが現れる。

▲カイムと合体する。かさなり合うふたり。

▲「カイムー！」叫び、飛ぶシレーヌ。

▲「シレーヌ…血まみれでもきみは美しい」

「何を言うのカイム、この傷がわからないの、私はもうすぐ死ぬのよ」
「わかっている、それをしょうちでいっている…」
「合体して、私の意識がふたりの体を支配したら、デビルマンに勝ってもすぐに死ぬのよ…」
「わかっている」
「あなたの意識が体を支配すれば、生き残る可能性はあるわ…でも、それは五分と五分、合体してみなければわからない…それでもいいの？」
カイムはしずかに語りつづける。
「おれは…生きのびるつもりはない、シレーヌ、きみにアモンをたおす勝利の感激をあじあわせたいだけだ、おれの体！　おれの能力をきみにやろう！」
「なぜ…」
カイムとシレーヌは黙って見つめあっていた。たがいに何かを思いながら…。
「シレーヌ…血まみれでもきみは美しい」
ひとこと言うと、カイムは尾を自分の首に巻きつけ、引きチギってしまった。
「カイムー！」
叫ぶシレーヌ。残った羽で空を舞いカイムと重なり合体した。その時、デビルマンは有象無象のデーモンにシレーヌへのトドメを邪魔されいらだっていた。
「シレーヌ〜〜〜！」
戦いの決着をつけようと叫ぶデビルマン。

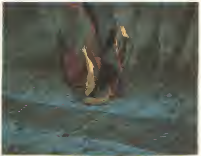
▲飛び出す瞬間、串刺しにされる。

▲角より発した電撃をくらうデビルマン。

▲デビルマンに向かって突進するシレーヌ。

▲「力が、悪魔のエネルギーが抜けていく」

▲「勝った！」勝利を確信したシレーヌ。


▲逃げるが、力を失い倒れるデビルマン。

▲勝利のよろこびの中、絶命していたシレーヌ。日の光を浴びながら立っていた。

▲気づくと、了が傷の手当てをしていた。

▲朝日が上がりまわりがハッキリしてくる。

大地を響かせ、カイムと合体したシレーヌが突進してくる。

「デビルマン！　シレーヌの執念がカイムの命が、きさまを殺す！」

カイムの角より発せられる電撃。デビルマンはそれを腕にくらい肉片が飛びちった。あまりの勢いに逃げようとするが飛び出すより一瞬はやくカイムの角がデビルマンをとらえ串刺しにした。

「きさまの命！　カイムにささげる」

吠えるシレーヌ。デビルマンはウイングをバタつかせて角より脱出する。

「やられた！　だめだ…」

地面におちるデビルマン。血を吐き腹をおさえたまま倒れてしまう。それを見たシレーヌは勝利の確信に歓喜した。力つきたデビルマン、変身がとけていく。しかし、シレーヌはトドメを刺しにこない。

「なぜだシレーヌ、おまえは勝ったんだぞ…なぜ勝利の快感をあじわおうとしない、なぜ…」

どのくらいの時間が流れたのかわからない。明が気づくとそこには了がいた。明の危機に新宿からかけつけたのだった。ハッとして明はシレーヌのことを聞く。それに答えるように指差す了。そこには仁王立ちのままピクリとも動かないシレーヌがいた。日が上がりはじめ、はっきり見えてくる。シレーヌはデビルマンを倒したと確信したとき、勝利の快感の中で絶命していたのだ。朝日にてらされるシレーヌ。その表情はたとえようもないほど美しかった。

ORIGINAL VIDEO ANIMATION

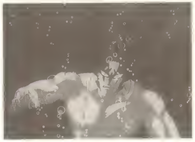
DEVILMAN

設定資料

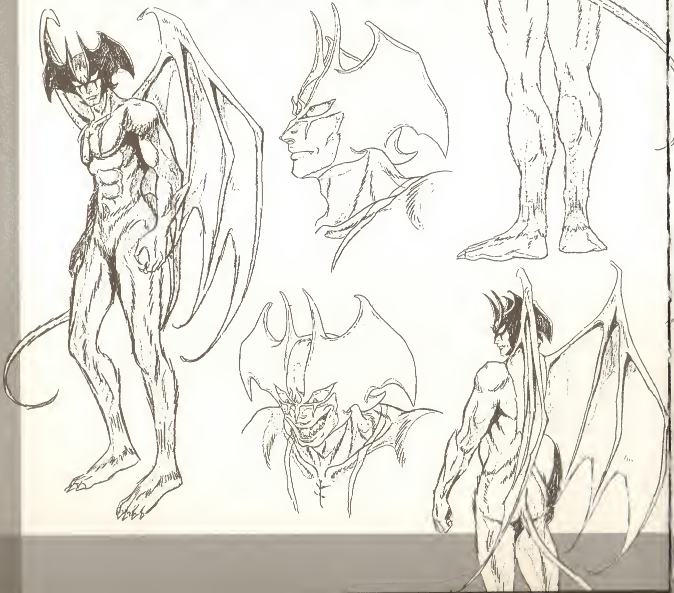
▲触角は伸縮可能で自在に操れる。

▲光線を発射する能力を持つ。

▲ウイングによる飛行能力を持つ。



▲行動範囲は広く大気中でも水中でも可能。

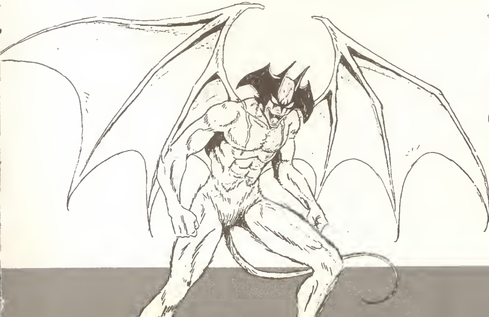


デビルマン(アモン)

地獄の野獣と呼ばれ恐れられていた勇者アモン。そのアモンが強靭な意志を持つ不動明と合体したことにより超悪魔となった。本来持っている能力に加え、敵の能力を学習し使用することもできる。

デビルマン(アモン)

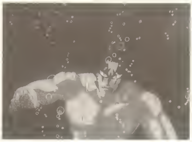
地獄の野獣と呼ばれ恐れられていた勇者アモン。そのアモンが強靭な意志を持つ不動明と合体したことにより超悪魔となった。本来持っている能力に加え、敵の能力を学習し使用することもできる。



▲触角は伸縮可能で自在に操れる。

▲光線を発射する能力を持つ。

▲ウイングによる飛行能力を持つ。



▲行動範囲は広く大気中でも水中でも可能。

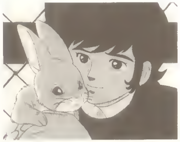
▲自由に操れる触角を持つ。

▲明のままウイング飛行する。

▲その眉間より光線を放つ明。

▲対ゲルマー戦での熱線攻撃。

▲合体後の明。以前より攻撃的な性格となり、戦いのときは殺戮を楽しみ、凶悪になる。



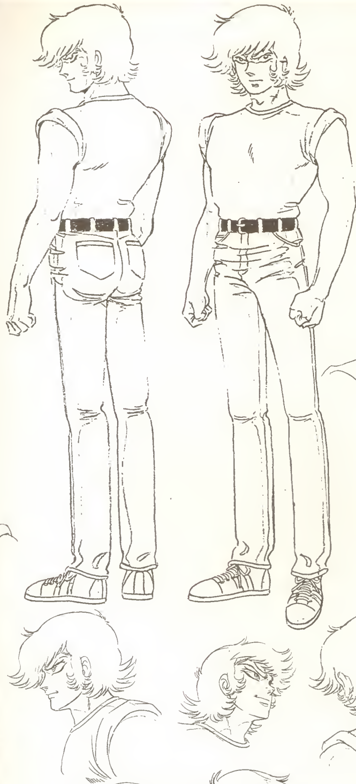
▲合体前は、優しく弱々しそうな青年だった明。しかし、その内には強い意志を秘める。

不動　明

不動明は、その強い意志でアモンに精神を乗っ取られることなく合体に成功しデビルマンとなった。合体後、明は以前のやさしい顔つきから凶悪になり性格も攻撃的になる。超能力は変身前でも使用できる。

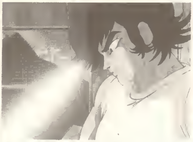
不動　明

不動明は、その強い意志でアモンに精神を乗っ取られることなく合体に成功しデビルマンとなった。合体後、明は以前のやさしい顔つきから凶悪になり性格も攻撃的になる。超能力は変身前でも使用できる。



▲自由に操れる触角を持つ。

▲明のままウイング飛行する。



▲その眉間より光線を放つ明。

▲対ゲルマー戦での熱線攻撃。

▲合体後の明。以前より攻撃的な性格となり、戦いのときは殺戮を楽しみ、凶悪になる。

▲合体前は、優しく弱々しそうな青年だった明。しかし、その内には強い意志を秘める。

▲超能力で物体を自由に操る。

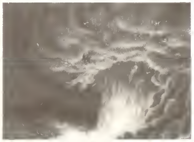
▲頭部の触角はレーダーともなる。

▲デビルマンの腕に噛みつくシレーヌ。

▲テレポート能力を持つ。

▲両腕よりPKBOMを撃つ能力を持つ。

▲カギツメを目的に向け発射できる。


▲力の集中により核爆発を起こせる。

▲カギツメを自由に飛ばし操れる。

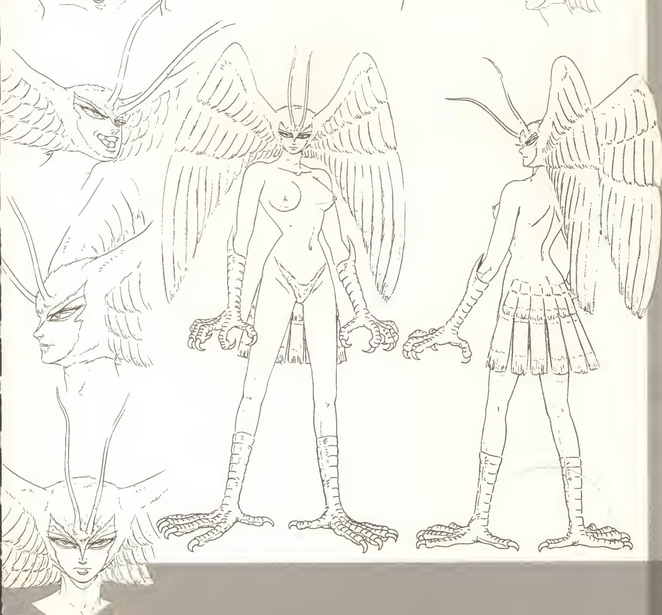
▲ツメより電流を流し敵の機能を狂わす。

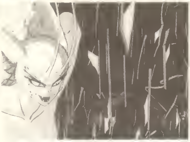
シレーヌ

デーモンよりデビルマンを倒すために派遣された刺客。これまで、その両手のカギツメで、数々のデーモンを引き裂いてきた実力者である。接近しての格闘には弱いが、超能力によるワザを豊富に持つ。

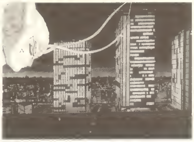
シレーヌ

デーモンよりデビルマンを倒すために派遣された刺客。これまで、その両手のカギツメで、数々のデーモンを引き裂いてきた実力者である。接近しての格闘には弱いが、超能力によるワザを豊富に持つ。





▲超能力で物体を自由に操る。



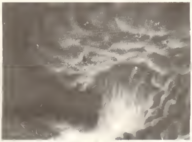
▲頭部の触角はレーダーともなる。

▲デビルマンの腕に噛みつくシレーヌ。

▲テレポート能力を持つ。

▲両腕よりPKBOMを撃つ能力を持つ。

▲カギツメを目的に向け発射できる。

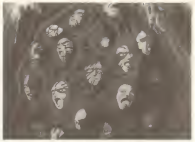


▲力の集中により核爆発を起こせる。

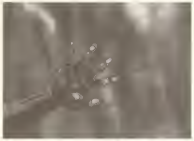
▲カギツメを自由に飛ばし操れる。

▲ツメより電流を流し敵の機能を狂わす。

▲ヘビのように伸びる首。


▲甲羅で呪いの言葉を吐く人間の顔。

▲手から熱線を発するジンメン。


▲敵を切り刻む鋭いツメを持つ。

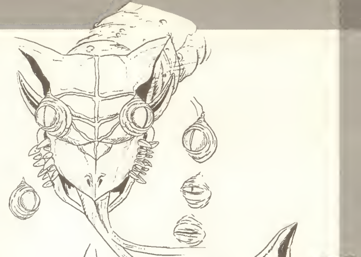
▲伸縮自在のジンメンの手。

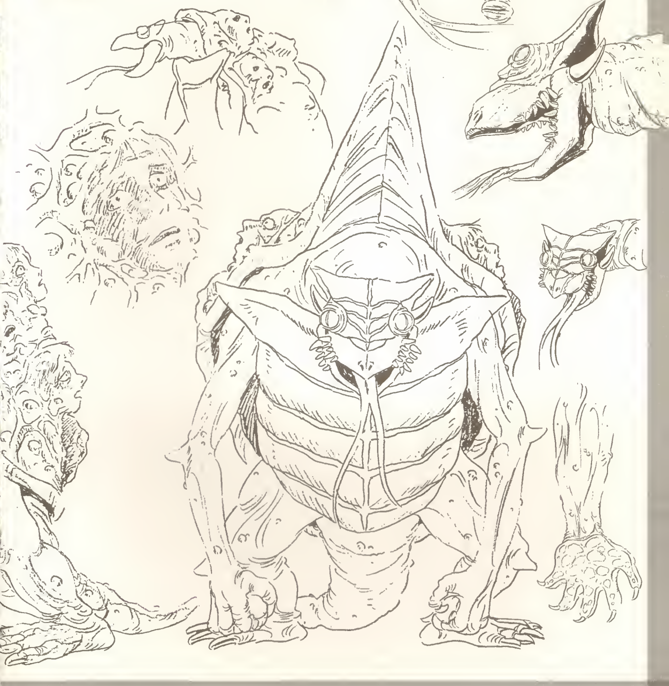
▲甲羅を鋭く変形させることができる。

▲誕生編に登場したジンメン。

ジンメン

食った人間を生きたまま甲羅に写し取る能力を持つ亀型デーモン。その醜い容姿から吐き出される、のらりくらりの口調による挑発は絶品。超能力は、体の形を自在に変形できる力を持ち、明も苦戦した。



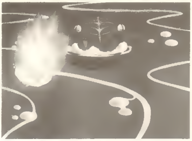


ジンメン

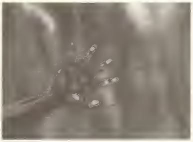
食った人間を生きたまま甲羅に写し取る能力を持つ亀型デーモン。その醜い容姿から吐き出される、のらりくらりの口調による挑発は絶品。超能力は、体の形を自在に変形できる力を持ち、明も苦戦した。

▲ヘビのように伸びる首。

▲甲羅で呪いの言葉を吐く人間の顔。



▲手から熱線を発するジンメン。



▲敵を切り刻む鋭いツメを持つ。

▲伸縮自在のジンメンの手。

▲甲羅を鋭く変形させることができる。

▲誕生編に登場したジンメン。

◀屋敷と一体化したアグウェル。

アグウェル

シレーヌにより呼び出されたデーモン。何とでも一体化できる能力を持ち、その触手を自在に操り、敵をしめ上げる等のワザを持つ。シレーヌ編で、大きなことを言うわりには、すぐにやられた弱いデーモン。

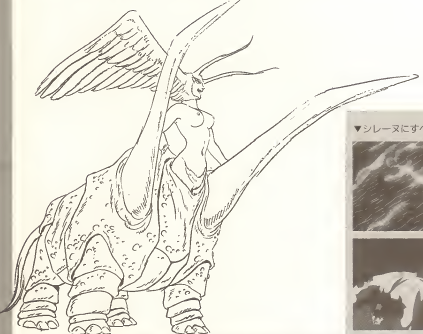
ゲルマー

アグウェルとともに呼び出されたデーモン。水をエネルギーとしており、自在に操る能力を持つ。そして、水さえあれば何処へでも忍び込むことができる。しかし、水がなければ何もできず極端にその戦闘能力は衰える。

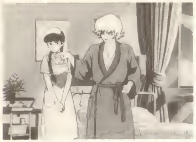
▼牧村家の風呂場へ潜入し美樹を襲う。

カイム

カイムは、アモンを倒す勝利の感激をシレーヌに与えたいため、自分の持つ能力を捧げた。巨体を生かした突進と、その太く鋭い角での串刺し、それより発する電撃で敵を撃つ能力を持つ。

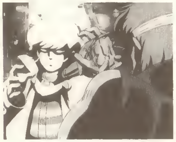


▼シレーヌにすべてを捧げるカイム。



▲回復も早く元気なようすの了。

▲デーモンに銃を向け戦う。



▲対デーモン戦にそなえる。

▲明の危機に助けに向かう。

▲了は明の作戦参謀的な存在。

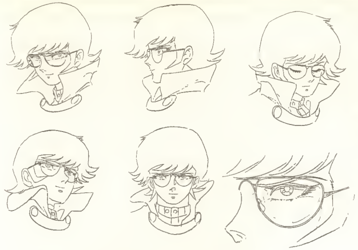
▲デーモンに意識を乗っ取られた父。

▲デーモンと人類について話すふたり。

▲デーモンの存在に気がついた。

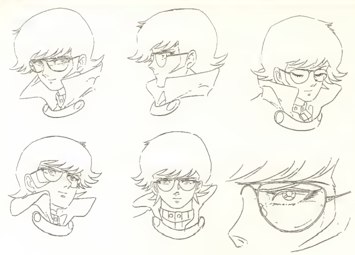
飛鳥　了

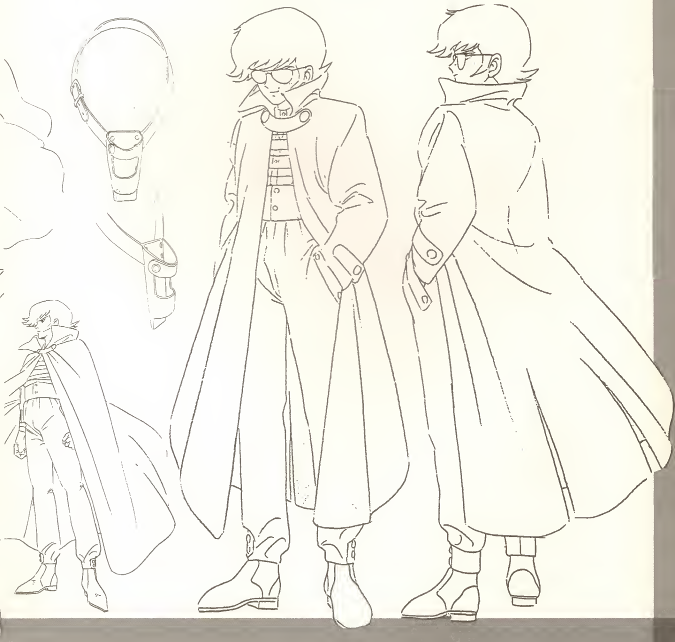
人類絶滅を企むデーモンと戦うためデビルマンを生むきっかけをつくる。飛鳥了は明とともに恐怖の遺産であるデーモンとの合体を実行する。しかし、そのとき了は合体に失敗し、明の戦いに巻き込まれて重傷を負う。

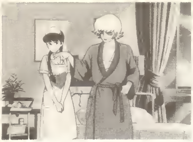


飛鳥　了

人類絶滅を企むデーモンと戦うためデビルマンを生むきっかけをつくる。飛鳥了は明とともに恐怖の遺産であるデーモンとの合体を実行する。しかし、そのとき了は合体に失敗し、明の戦いに巻き込まれて重傷を負う。

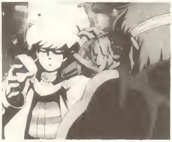






▲回復も早く元気なようすの了。

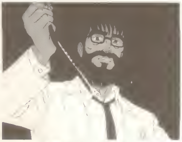
▲デーモンに銃を向け戦う。



▲対デーモン戦にそなえる。

▲明の危機に助けに向かう。

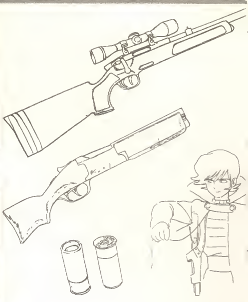
▲了は明の作戦参謀的な存在。



▲デーモンに意識を乗っ取られた父。

▲デーモンと人類について話すふたり。

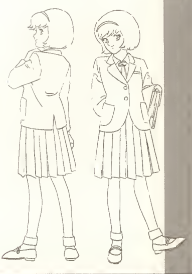
▲デーモンの存在に気がついた。



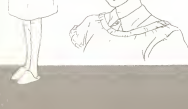
牧村美樹

美樹は、明がやっかいになっている牧村家の長女。やさしくおとなしい明とちがって、明るく活発な女の子だ。明のやさしいところに美樹は好意を持っているが、明の態度の煮え切らなさにいつもイライラしている。

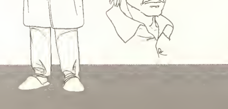
太郎（タレちゃん）



美樹の母



美樹の父



THE DEVILMAN

CONTENTS

DEVILMAN ILLUSTRATION 1

DEVILMAN FIGURES 35

ORIGINAL VIDEO ANIMATION
DEVILMAN[誕生編] 41

ORIGINAL VIDEO ANIMATION
DEVILMAN[妖鳥シレーヌ編] 61

ORIGINAL VIDEO ANIMATION
DEVILMAN[設定資料] 81

ORIGINAL VIDEO ANIMATION
DEVILMAN[CAST&STAFF] 95

ORIGINAL VIDEO ANIMATION DEVILMAN

誕生編

STAFF

原作・総指揮……永井　豪
監督……………飯田つとむ
脚本……………永井　豪
　　　　　　　飯田つとむ
キャラクターデザイン
　　　　　　　小松原一男
作画監督…………安藤正浩
美術監督…………椋尾　篁
撮影監督…………玉川芳行
音響監督…………山田悦司
音　　楽…………川井憲次
アニメーション制作
　　　　オープロダクション
制　　作…………㈱講談社
　　　　　　キングレコード

CAST

不動　明…………速水　奨
飛鳥　了…………水島　裕
牧村美樹…………澄川真琴
不動礼次郎……津嘉山正種
不動須弥子………池田昌子
飛鳥教授…………寺島幹夫
木 刀 政…………玄田哲章
チェーン万次郎…内田直哉
ド ス 六…………亀山助清

妖鳥シレーヌ編

STAFF

原作・総指揮……永井　豪
監督……………飯田つとむ
キャラクターデザイン
　　　　　　　小松原一男
作画監督………小松原一男
　　　　　　　安藤正浩
美術監督…………宮前光春
　　　　　　　海老沢一男
撮影監督…………玉川芳行
録音監督…………千葉　繁
音　　楽…………川井憲次
アニメーション制作
　　　　オープロダクション
制　　作…………㈱講談社
　　　　　　　㈱バンダイ

CAST

不動　明…………速水　奨
デビルマン
牧村美樹……高野槙じゅん
飛鳥　了…………水島　裕
不動須弥子………池田昌子
シレーヌ…………榊原良子
ジンメン…………青野　武
カイム……………石塚運昇
ゲルマー…………立木文彦
アグウェル………中嶋聡彦
タレちゃん………鈴木みえ
看護婦…………村上はるみ
パイロット……佐々木誠人

THE DEVILMAN

©ダイナミック企画・講談社・エモーション・キングレコード

発　行　人	加納将光
編　集　人	酒井征勇
発　行　所	株式会社　勁文社 〒164-0012 東京都中野区本町3丁目32番15号 ☎03-3372-3281(編集)・03-3372-3291(営業)振替　00190-8-13311番
写植・版下	株式会社　三共社
印　刷　所	凸版印刷株式会社
製　本　所	明興製本工業株式会社
構　成・コピー・編　集・レイアウト・表紙デザイン	フロッシュ
協　　　力	ダイナミックプロ　バンダイ　VOLKS

落丁、乱丁本は当社にておとりかえいたします。発行日、定価は、カバーに表示してあります。

ISBN4-7669-1228-4 C0076

降臨！悪魔人間(デビルマン)。

書き下ろしイラスト、フィギュア、
オリジナルビデオアニメーション
フィルムストーリー、
設定資料が刻む魔の爪痕。

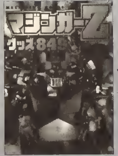
降臨！悪魔人間（デビルマン）。

書き下ろしイラスト、フィギュア、
オリジナルビデオアニメーション
フィルムストーリー、
設定資料が刻む魔の爪痕。

ケイブンシャ

好評発売中

日本特撮・幻想映画全集
A5判400頁　3250円（税抜き）

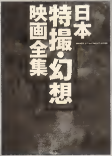


マジンガーZグッズ849
A5判128頁　1500円（税抜き）

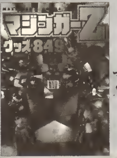
ISBN4-7669-1228-4 C0076 ¥1340E ●定価:本体1340円+税

THE DEVILMAN

好　評　発　売　中



日本特撮・幻想映画全集
A5判100頁　3250円（税抜き）



マジンガーZグッズ849
A5判128頁　1500円（税抜き）

ISBN4-7669-1228-4 C0076 ¥1340E ●定価:本体1340円+税